

42615  
教科書文庫

4
810
51-1970
20000 79809

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

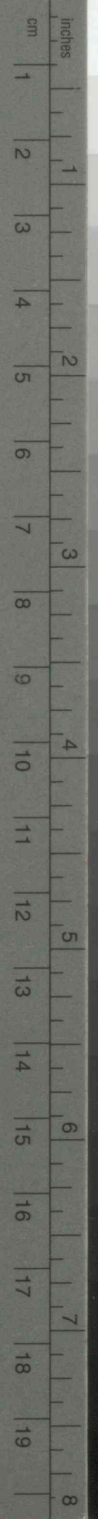


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

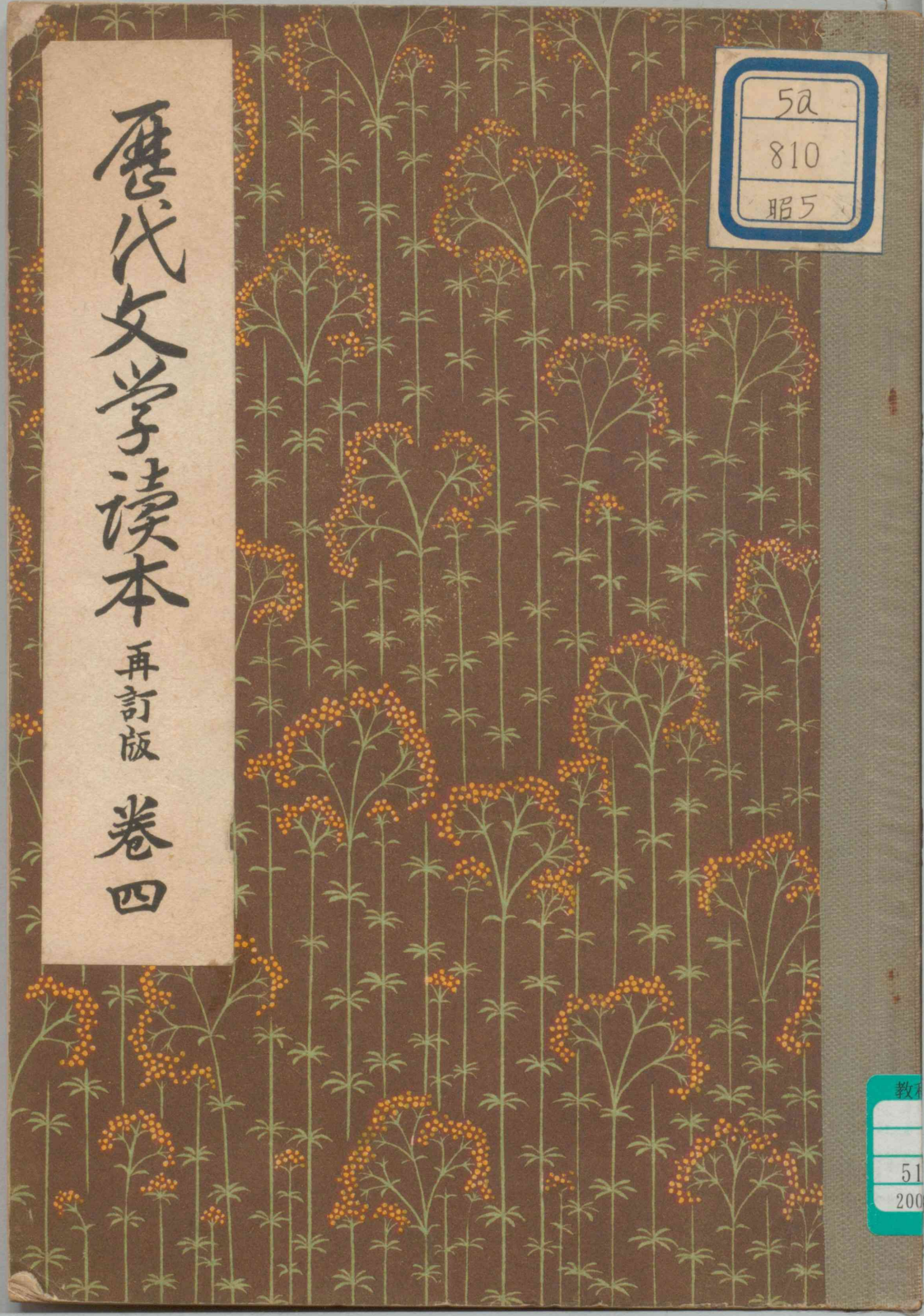
© Kodak, 2007 TM: Kodak



5a
810
昭5

51
200

歴代文学讀本 再訂版 卷四



資料室  
昭和五年二月十四日  
師範學校圖書館  
文部省檢定

教科書文庫  
4  
810  
51-1930  
2000079809

5a  
810  
AB5

東京高等師範學校附屬中學校內  
國語漢文研究會編纂

再訂版

# 歷代文學讀本

東京 目黒書店發兌

広島大学図書  
2000079809  




（藏所家爵）





後三年合戰繪詞 (池田侯爵家所藏)

歴代文學讀本 卷四

目次

一	方丈記	一
一	行く川のながれ	一
二	養和の飢渴	三
三	閑居の氣味	七
四	一期の月影	二
二	十訓抄	三
一	淀のわたり	三
二	小式部内侍	四

三	朋友選ぶべし	三
四	養老の瀧	七
五	鴨長明	元
三	古今著聞集	三
一	中納言顯基卿	三
二	菅丞相	三
三	三舟の才	三
四	能因入道	三
五	足柄山の祕曲	六
六	頼光朝臣	七
七	衣のたて	七
八	金岡の馬	七

九	鳥羽僧正	四〇
一〇	釜ぬすびと	四一
四	宇治拾遺物語	四三
一	袴垂保昌に逢ふ事	四三
二	元輔落馬の事	四三
五	増鏡	四四
一	序	四四
二	實朝の死	四四
三	泰時の出發	四五
四	京都の騷擾	四五
五	後嵯峨天皇	六七
六	持明院の蹴鞠	七三

七	元寇	七
八	萩の戸の御歌合	九
九	土岐多治見の亂	八
一〇	還御	八五
六	新古今集	九〇
七	徒然草	九四
一	つれづれなるまゝに	九四
二	家居のつきづきしく	九七
三	同じ心ならむ人と	九七
四	しばしの旅	一〇〇
五	飛鳥川の淵瀬	一〇一
六	過ぎにし方	一〇二

七	人の亡きあと	一〇四
八	雪のあした	一〇五
九	荒れたる庭	一〇五
一〇	法然上人	一〇六
一一	賀茂のくらべ馬	一〇九
一二	稻葉の露	一〇九
一三	堀池の僧正	一一〇
一四	鬼のそらごと	一一一
一五	先達はあらまほし	一一三
一六	足鼎	一一三
一七	いもがしら	一一五
一八	名を聞くより	一一六

一九 下部に酒飲ますること……………一八

二〇 弓射ることを習ふに……………一三〇

二一 猫また……………一三三

二二 高名の木のぼり……………一三三

二三 ぼろく……………一三五

二四 顔回は……………一三七

二五 花はさかりに……………一三八

二六 能をつかんとする人……………一三三

二七 筆をとればもの書かれ……………一三四

二八 一道にたづさはる人……………一三五

二九 さしたる事なくて……………一三六

三〇 貝をおほふ人……………一三七

三一 わかき時……………一三九

三二 世には心得ぬことの多き……………一四〇

三三 松下禪尼……………一四一

三四 よろづの道の人……………一四一

三五 一事を勵むべし……………一四五

三六 よろづのとが……………一四九

三七 主ある家……………一四九

三八 獅子狛犬……………一五〇



目次 終

歷代文學讀本 卷四

一 方丈記

一卷。鴨長明の著。安元の大火、治承の大風及び遷都養和の飢饉、元暦の地震等を詳記して厭世隱遁の思想を述ぶ。順徳天皇の建保年中の作なるべしといふ。

鴨長明家は代々山城の國賀茂社の氏人なり。朝廷に仕へて後鳥羽天皇の寵を受け、和歌所の寄人となる。後志を得ずして佛門に入り、洛外の山中に世を遁れたり。歿年明かならず。

一 行く川のながれ

行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみ

に浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまることなし。世の中にある人と住家とまたかくの如し。玉敷の都の中に棟を並べ、薨を争へる尊き卑しき人の住居は、代々を経てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。或は去年破れて今年造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれにおなじ。處もかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は、三十人が中に僅に一人二人なり。

朝に死し、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて、何方へか去る。又知らず、假のやどり、誰が爲に心を惱まし、何によりてか目を悦ばしむる。この主人と住家と無常を争ひ去るさま、いはば朝顔の露に異ならず。或は露おちて花残れり、残るといへども朝日に枯れぬ。或は花萎みて、露なほ消えず、消えずといへどもゆふべを待つことなし。

二 養和の飢渴

養和の頃云々  
治承五年七月  
十四日、養和  
と改元せられ  
翌二年五月二  
十七日、壽永  
と改元せらる  
飢饉は養和元  
年より二年に  
わたる。



鴨 養和の頃かとよ、久しくなり  
てたしかにも覺えず、二年が  
間、世の中飢渴して、あさまし  
長きこと侍りき。或は春夏日  
明 どり、或は秋冬大風大水など、  
よからぬ事ども打ちつゞき  
て、五穀悉く實のらず。空し

く春耕し夏植うる營のみありて、秋刈り冬收むるぞめきはなし。これによりて國々の民、或は地を捨てて境を出て、或は家を忘れて

山に住む。さまざまの御祈始まりて、なべてならぬ法ども行はるれども、さらにそのしるしなし。京の習ひ、何わざにつけても、みなもとは田舎をこそ頼めるに、絶えて上る物なければ、さのみやは、操も作りあへん。念じわびつゝ、さまざまの寶物、かたはしより捨つるが如くすれども、更に目見たつる人なし。たま／＼換ふるものは、金をかろくし、粟をおもくす。乞食、道のべに多く、うれへ悲しむ聲耳に満てり。

明くる年  
養和二年即ち  
壽永元年。

少水の魚

往生要集卷三  
に文珠出離經  
を引いて曰  
く、「佛説レ頌  
曰、是日已過、

前の年かくの如くからくして暮れぬ。明くる年はたちなほるべきかと思ふほどに、あまさへ疫病うち添ひて、まさるやうに跡方なし。世の人皆飢ゑ死にければ、日を経つゝきはまり行くさま、少水の魚のたとへに叶へり。はてには笠うちき、足ひきつゝみ、よろしき姿したる者、ひたすらに家ごとに乞ひありく。かくわびしれた

命期衰滅、如三  
少水魚、斯有二  
何樂。

河原  
賀茂河原。

濁悪の世  
五濁十惡の盛  
に行はれる時  
期。五濁は見・  
煩惱・衆生・  
命・劫をいひ、  
十惡は殺・盜・  
姦・妄語・惡  
口・兩舌・綺  
語・食・瞋・  
邪見をいふ。

る者どももありくかと思れば、すなはち倒れふしぬ。築地のつら路のほとりに飢ゑ死ぬるたぐひは數も知らず、取りすつるわざもなければ、臭き香、世界にみち／＼て、變り行くかたち有様、目もあてられぬこと多かり。況んや河原などには、馬車の行きかふ道だにも無し。あやしき賤山がつも、力盡きて薪にさへ乏しくなりゆけば、頼む方なき人は、自らが家をこぼちて、市に出でて之を賣るに、一人が持ち出でてたる價、なほ一日が命を支ふるにだに及ばずとぞ。怪しき事は、かゝる薪の中に、丹つき白銀黄金の箔など所々につき、て見ゆる木のわれ相交れり。これを尋ねれば、すべき方なき者の、古寺に到りて佛を盜み、堂の物具を破り取りて、割碎けるなりけり。濁悪の世にしも生れ逢ひて、かゝる心うきわざをなん見侍りし。又あはれなる事侍りき。さりがたき妻夫もちたる者は、その思ま

さりて志深きは、必ず先だちて死しぬ。その故は、わが身をば次に  
なして、いたはしく思ふ方に、たま／＼乞ひ得たる物を、まづゆづる  
によりてなり。されば親子あるものは、定まれることにて親ぞ先  
立ちける。また母の命、盡きたるを知らずして、いとけなき子の、そ  
の乳房に吸ひつきつゝ、ふせるなどもありけり。

仁和寺に隆曉法印といふ人、かくしつゝ、數知らず死ぬることを悲  
しみて、その死首の見ゆるごとに、額に阿字を書きて、縁を結ばしむ  
るわざをなんせられける。その人數を知らんとて、四五兩月が程  
數へたりければ、京の中、一條より南、九條より北、京極より西、朱雀よ  
り東、路のほとりなる頭すべて四萬二千三百餘りなんありける。  
いはんや、その前後に死ぬるもの多く、河原、白河、西の京、もろ／＼の  
邊地などを加へていはば、際限もあるべからず。いかにいはんや

仁和寺  
京都の西郊に  
ある眞言宗の  
寺。

隆曉法印

法印は僧位。

一條よりは云

平安京の左京

である。

白河  
賀茂川と東山  
との間、北は  
今の白川町よ  
り南は九條大

路の東に至る  
までを白河と  
總稱した。

西の京

平安京の右京  
にして、早く  
荒廢した。

七道

東海道・東山  
道・北陸道・山  
陰道・山陽道・  
南海道・西海  
道。

長承の頃

長承三年。こ  
の時から四十  
七八年前のこ  
とである。

七道諸國をや。近くは崇徳院の御位の時、長承の頃かとよ、かゝる  
ためしはありけりと聞けど、その世の有様は知らず。まのあたり  
いとめづらかに、悲しかりしことなり。

### 三 閑居の氣味

大かたこの所に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今すて  
に五年を経たり。假の庵もやゝふる屋となりて、軒には朽葉ふか  
く、土居に苔むせり。おのづから事のたよりに都を聞けば、この山  
に籠り居て後、やんごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。ま  
してその數ならぬたぐひ、盡してこれを知るべからず。たび／＼  
の炎上にほろびたる家、又いくそばくぞ。たゞかりの庵のみ、のど  
けくして、恐なし。程せばしといへども、夜ふす床あり、晝居る座あ

人の友たる者

人之爲レ友者、  
以レ勢以レ利、  
不レ以レ交、  
不レ如レ無レ友。  
(池亭記)

り。一身をやどすに不足なし。がうなは小き貝を好む。これよく身を知れるによりてなり。みさごは荒磯に居る。すなはち人を恐るゝが故なり。われ又かくのごとし。身を知り世を知れば、願はず、まじらはず。たゞ静かなるを望とし、憂なきを樂とす。すべて世の人のすみかを造るならひ、必ずしも身の爲にはせず。或は妻子眷屬の爲に造り、或は親昵朋友の爲に造る。或は主君師匠、および財寶馬牛の爲にさへこれを造る。われ今身の爲に結べり。人の爲に造らず。故いかんとなれば、今の世のならひ、この身の有様、伴ふべき人もなく、たのむべきやつこもなし。たとひ廣く造れりとも、誰をかやどし、誰をかすゑん。それ、人の友たる者は、富めるをたふとみ、ねんごるなるを先とす。かならずしも情あると、すなほなるとをば愛せず。たゞ絲竹花月

を友とせんには如かじ。人の奴たるものは、賞罰の甚しきを願み、恩の厚きを重くす。更にはぐくみあはれむといへども、安く静かなるをば願はず。たゞわが身を奴とするには如かず。若しなすべきことあれば、すなはちおのづから身を使ふ。たゆからずしもあらねど、人を従へ、人を願みるよりはやすし。若しありくべき事あれば、みづから歩む。苦しといへども、馬鞍牛車と、心を悩ますには似ず。今一身を分ちて二つの用をなす。手のやつこ、足の乗物、よくわが心にかなへり。心また身の苦しみを知れば、苦しむ時はやすめつ、まめなる時は使ふ。使ふとても、たび／＼すぐさず、物うしとても、心を動かすことなし。いかにいはんや、常にありき、常にはたらくは養生なるべし。何ぞいたづらに休み居らん。人を苦しめ人を悩ますはまた罪業なり。いかゞ他の力をかるべき。

糧乏しければ  
飢者甘<sub>レ</sub>食。  
渴者甘<sub>レ</sub>飲。  
是未<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>飲食  
之正<sub>一</sub>也。飢渴  
害<sub>レ</sub>之也。  
(孟子盡心上)

三界は云々  
夫三界唯一心  
心外無<sub>二</sub>別法<sub>一</sub>、  
心佛及衆生、  
是三無<sub>二</sub>差別<sub>一</sub>。  
(自行略記)

衣食のたぐひまた同じ。藤の衣、麻のふすま、得るに従ひて肌はだをか  
くし、野邊のつばな、峯の木の實、わづかに命をつなぐばかりなり。  
人に交はらざれば、姿を恥づる悔もなし。糧乏しければ、おろそか  
なれども、なほ味ひを甘くす。すべてかやうの事、楽しく富める人  
に對していふにはあらず。たゞわが身一つにとりて、昔と今とを  
たくらぶるばかりなり。おほかた世を遁れ、身を捨てしより、うら  
みもなくおそれもなし。命は天運にまかせて、惜しまずいとはず。  
身を浮雲になずらへて、頼まず、まだしとせず。一期のたのしみは、  
うたゝねの枕の上にきはまり、生涯の望はをりくゝの美景にのこ  
れり。

それ三界はたゞ心一つなり。心もしやすからずば、牛馬七珍もよ  
しなく、宮殿樓閣も望なし。今さびしきすまひ、一間ひともの庵、みづから  
これを愛す。おのづから都に出でては、身の乞食となれることを  
恥づといへども、かへりてこゝにをる時は、他の俗塵ぜいじんに着ぢやくすること  
をあはれむ。もし人このいへることを疑はば、魚鳥うりさまの分野ぶんぎを見よ。  
魚は水に飽かず、魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ  
鳥にあらざればその心を知らず。閑居の氣味も亦かくの如し。  
住まずして誰かさたらん。

四 一期の月影

そもくゝ一期の月影傾きて、餘算山の端に近し。忽ちに三途の閻  
にむかはん時、何のわざをかかこたんとする。佛の人ををしへ給  
ふ趣は、事にふれて執心なかれとなり。いま草の庵を愛するもと  
がとす。閑寂に着するも障なるべし。いかゞ用なき樂をのべて

淨名居士

維摩詰をいふ、方丈の室に住む。

周梨槃特

釋迦の弟子中の愚人。

建曆

順德天皇の御代。

蓮胤

長明の法名。

空しくあたら時を過さん。静かなる曉、この理を思ひつゞけて、みづから心に問ひていはく、世を遁れて山林にまじはるは、心ををさめて道を行はんが爲なり。然るを、汝が姿は聖に似て心は濁にしめり。住家はすなはち淨名居士の跡をけがせりといへども、たもつ所は、わづかに周梨槃特が行にだも及ばず。もしこれ貧賤の報のみづから惱ますか、はた又妄心のいたりて狂はせるか。その時、心更に答ふることなし。たゞ傍に舌根をやとひて、不請の念佛兩三度を申してやみぬ。時に建曆の二年三月のつごもりごろ、桑門蓮胤、外山の庵にしてこれを記す。

月かげは入る山の端もつらかりき

たえぬ光を見るよしもがな

### 二十訓抄

三卷。今昔物語に倣ひて種々の古話を集め、且これを十訓の下に分類したり。後深草天皇の建長四年の作なり。著者は詳かならず。

#### 一 淀のわたり

俊頼朝臣語りて曰く、白川院、淀に御方違の行幸ありけるに、五月ばかりの事にやありけん、女房殿上人の舟あまたありけるに、曉になるほどに、向ひの方に郭公一聲ほのかに鳴きてすぐ。俊頼一首詠ぜまほしくおぼえしに、女房の舟の中に忍びたる聲にて、淀のわたりのまだ夜ぶかきに。と詠められたりし、時に臨みてめでたかりき。人々感歎して今にわすれず。あたらしくよみたらんにはまさされ

俊頼源氏。

淀のわたり云

いづかたに鳴きて行くらんほととぎす淀のわたりのまだ夜ぶかきに (拾遺集)

り。となんいはれける。(第一)

二 小式部内侍

小式部内侍  
和泉式部の女  
保昌  
藤原氏。丹後  
守。  
定頼  
藤原氏。

和泉式部保昌が妻にて丹後に下りける程に、京に歌合ありけるに、小式部内侍歌よみにとられて詠みけるを、定頼中納言戯れて、小式部内侍の局にありけるに、丹後へ遣しける人は参りたりや。いかに心もとなく思すらん。といひて局の前を過ぎられけるを、御簾よりなからばかり出でて、僅かに直衣の袖をひかへて、

大江山いくのの道の遠ければ

まだふみも見ずあまの橋立

とよみかけけり。思はずにあさましくて、こはいかに、かゝるやうやはある。とばかりいひて、返歌にも及ばず、袖をひき放ちて逃げら

れけり。小式部これより歌よみの世におぼえ出できにけり。これには、これほどの歌、たゞ今詠み出すべしとはしらざりけるにや。(第三)

三 朋友選ぶべし

麻の中の云々  
蓬生麻中、不  
レ扶自直。(荀  
子勸學篇)

或人いはく、人は善友にあはん事を希ふべきなり。麻の中の蓬はためざるに自ら直しといふたとへあり。と。蓬は枝さし直からぬ草なり。されども麻に生ひまじりぬれば、ゆがみて行くべき道のなきまゝに、心ならずうるはしく生ひのぼるなり。心のあしき人なれども、うるはしくうちある人の中に交りぬれば、さすが彼此を憚るほどに、自ら直しくなる心なり。之によつて善き友にあはんこと、經にも説かれ文にもすゝめたり。顔氏が家訓には、

顔氏家訓  
北齊の黃門郎  
顔之推の著。



人の心は云々  
無情水隨三方  
圓器。(白樂  
天)

九條殿  
藤原師輔。

薰菴云々  
顏淵曰、薰菴  
不<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>器而藏  
(孔子家語)

芝澗に云々

與善人居如入芝蘭之室久而自芳也。  
與惡人居如入鮑魚之肆久而自臭也。

といへり。又或文には、人の心は水の入物に隨ふが如し。入物細ければ即ち細し、圓ければ即ち圓くなる。心は朋友にならふ。何ぞ擇ばざるべけん」とかけり。又九條殿遺誠には、高聲惡狂の人に伴ふ事なかれと教へ給へり。かゝれば、はかなく打語らはん友なりとも、能くその人を擇ぶべし。「薰菴器を異にすべし」となり。花のもとに春ばかりを契り、月の前に一夜を限る友までも、情あるたぐひは、忘れ難く思ひ出でらるゝものなり。すべて友をかたらふには、隔つる心なきを徳とす。ゆめ／＼心悪しからん人に伴ふべからず。

芝澗に住みし四人の翁、竹林に籠りし七賢の類、さこそおもはしき

商山の四皓をいふ。  
東園公・夏黃公・冉里先生・綺里季。  
竹林の七賢  
嵇康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎。  
子猷・安道・劉惔・玄度  
みな晉の高士  
鄒・枚  
兎園  
孝王の園。  
仲尼  
孔子。  
平臺  
孝王の離宮。

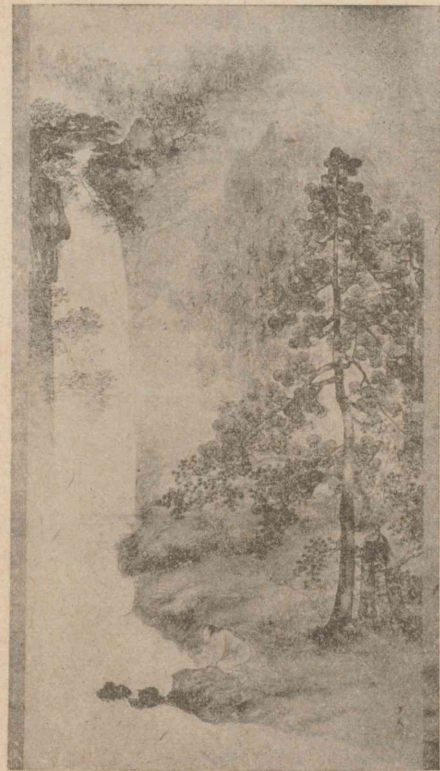
友なりけめ。子猷は雪の夜月にあくがれて、遙かに剡縣の安道を尋ね、劉惔は清風朗月に玄度のなき事を恨みけり。誠に心にかなふ友のなからんには、いかなる興宴も物憂く覺えぬべし。さればこそ梁の孝王は、鄒枚と聞えし二人の臣さりにしかば、兎園の遊をも留め給ひ、魯の仲尼は、子路といひしおもはしき弟子に後れて後には、互に勧めける物をも捨て給ひにけれ。清和第九の皇子、貞眞親王の作り給へりける。

鄒枚散後平臺靜。空遣春風只斷腸。

と。文選第二十一、魏文帝與吳質書に云はく、昔伯牙絕絃於鐘期、仲尼覆醢於子路、痛知音之難遇、傷門人之無逮」と。(第五)

四 養老の瀧

昔元正天皇の御時、美濃の國に貧しく賤しき男ありけるが、老いたる父を持ちたり。この男、山の草木をとりて、その値を得て父を養ひけり。この父、朝夕あながちに酒を愛しほしがる。これにより



養老の瀧

て、男なりひさごといふものを腰につけて、酒を賣る家に行きて、常にこれを乞ひて父を養ふ。あるとき山に入りて、薪をとらんとするに、苔深き石にすべりて、うつぶしにまろびたりけるに、酒の香しければ、思はずに怪しとて、そのあたりを見る

に、石中より水流れ出づることあり。その色酒に似たり。汲みてなむるに、めでたき酒なり。うれしく覺えて、その後日々にこれを汲みて、あくまで父を養ふ。時に帝この事を聞き召して、靈龜三年九月に、その所へ行幸ありて御覽じけり。是則ち至孝の故に、天神地祇あはれみて、その徳をあらはすと感ぜさせ給ひて、後に美濃守になされけり。その酒の出づる所をば、養老の瀧とぞ申す。且はこれに依りて、同十一月に年號を養老とあらためられけり。(第六)

五 鴨長明

近頃賀茂の社の氏人に、菊太夫長明といふものありけり。和歌管絃の道人に知られたりけり。社司を望みけるが、叶はざりければ、世を恨みて出家して後、同じく先立ちて世を背ける人の許へいひ

やりける、

いづくより人は入りけんまくず原

秋かぜ吹きし道よりぞこし

深き恨の心のやみは、しばしの迷なりけれど、この思をしもしるべにて、まことの道に入りけるこそ、生死涅槃と同じく、煩惱菩提一つなりけることわり違はざりけりと覺ゆれ。この人、後には大原に住みけり。方丈記とて、假名にて書きおけるものを見れば、始の詞に、行く河のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず」とあるこそ、川閼水以成川、水滔々而日度、世閼人而爲世、人冉冉而行暮」といふ文を書けるよと覺えていとあはれなれ。しかしてかの庵にも、をりごとつぎ琵琶などを伴へりけり。念佛のひまゝには、絲竹のすさびを思ひ捨てざりけるこそ、すきの程いとやさしけれ。

川閼水云々  
文選四「歎逝賦」中の句。

その後、もとのごとく和歌所の寄人にて候ふべきよしを、後鳥羽院より仰せられければ、

沈みにき今さらわかぬ浦波に

よせばやよらんあまの捨舟

と申して、終に籠居して止みにけり。世をも人をも恨みけるほどならば、かくこそあらまほしけれ。(第九)

### 三 古今著聞集

二十卷。橘成季の著。政教文藝雜事等に關する著名の説話を記載したり。蓋し「宇治拾遺物語」「江談抄等」に倣ひしものなるべし。後深草天皇の建長六年に成れり。  
橘成季は其の傳詳かならず。

#### 一 中納言顯基卿

中納言顯基  
源氏。  
新主  
後朱雀天皇。

中納言顯基卿は、後一條院時めかし給ひて、若くより官位につきて恨なかりけり。帝におくれ奉りければ、忠臣は二君に事へずといひて、天台楞嚴院らうげんいんにのぼりて、頭おろしてけり。帝かくれさせ給ひける夜、火をともしざりければ、いかにと尋ぬるに、主殿司新主の御事を勤むとて參らぬよし申しけるに、出家の心もつよくなりけり。

り。この人若くより道心おはしまして、常のことぐさに、

古墓何世人 不知姓與名 化路邊土 年々春草生 (卷四)

#### 二 菅丞相

古墓云々  
白樂天の詩。

菅丞相  
菅原道真。  
内  
醍醐天皇。



菅 丞 相

菅丞相、昌泰三年九月十日の宴に、正三位の右大臣の大將にて、内に候はせ給ひけるに、

君富春秋 臣漸老 恩無涯  
岸報猶遲

と作らせ給ひければ、叡感のあまりに、御衣をぬぎてかづけさせ給ひしを、同四年正月に、本院の大臣の奏事不實によりて、俄かに太宰權帥に遷され給ひしかば、いか

本院の大臣  
藤原時平。

ばかり世もうらめしく、御憤も深かりけめども、猶君臣の禮は忘れ  
がたく、魚水の契も忍び得ずや思し召され給ひけん、都のかたみと  
て、かの御衣を御身にそへられたりけり。さて次の年の同日、かく  
ぞ詠ぜさせたまひける。

去年今夜侍清涼 秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在此 捧持毎日拜餘香 (卷四)

三 三舟の才

御堂關白、大井川にて遊覽し給ふ時、詩歌の船をわかちて、各、堪能の  
人々をのせられけるに、四條大納言に仰せられていはく、「いづれの  
舟に乗るべきぞや」と。大納言いはく、「和歌の舟にのるべし」とて乗  
られけり。さてよめる、

御堂關白  
藤原道長。  
四條大納言  
藤原公任。

朝まだきあらしの山のさむければ

紅葉のにしききぬ人ぞなき

後にいはれけるは、いづれの舟に乗るべきぞと仰せられしこそ、心  
おどりせられしか。詩の

藤原三年三月三日、右曲水宴所、後院、  
停子東又麻呂、公卿、座、公卿、余、儀、設、文  
人、座、於、海、邊、取上人在津  
西自余在東 武部大補直幹  
及殿上人藏人雨又言、世、所、學、生、し、よ  
入白仙氣、門、着、座、様、前、畢、賜、酒、肴、公、卿、下  
見、流、盃、海、水、と、文、人、亦、飲、晚、頭、而、樂、所、合、奏  
弦、琴、誦、詩、了、又、奏、管、絃、長、給、公、卿、祿、左、少、祿  
洛、時、唱、見、泰、後、日、給、侍、臣、及、文、人、樂、所、人、祿

藤原公任筆

この歌花山院拾遺集をえ  
らばせ給ふ時、紅葉の衣と  
かへて、入るべきよし仰せ

られけるに、大納言しかるべからざるよし申されければ、もとのま  
まにて入れにけり。

帥民部卿  
源氏。  
西川  
大井川。

帥民部卿經信卿、又この人に劣らざりけり。白河院西川に行幸の時、詩歌管絃の三つの舟をうかべて、その道の人々を分ちてのせられけるに、經信卿遅參の間、殊の外に御氣色あしかりけるに、とばかり待たれて參りけるが、三事かねたる人にて、汀に跪きて、やゝ、いづれの舟にてもよせ候へ、といはれたりける、時にとりていみじかりけり。かくいはん料に遅參せられけるとぞ。さて管絃の舟に乗りて、詩歌を獻ぜられたりけり。三舟に乗るとはこれなり。(卷五)

四 能因入道

能因  
俗名橋永愷。  
平安朝末期の  
歌人。  
實綱  
日野氏。

能因入道、伊豫守實綱に伴ひて、彼の國に下りたりけるに、夏の初、日久しく照りて、民のなげき淺からざるに、神は和歌にめでさせ給ふものなり、試によみて三島に奉るべきよしを、國司しきりにすゝめければ、

あまの川苗代水にせきくだせ

天くだります神ならば神

とよめるを、御幣みけに書きて、神官して申し上げたりければ、炎旱の天俄かに曇りわたりて、大いなる雨ふりて、枯れたる稻葉おしなべて緑にかへりけり。忽ちに天災を和ぐる事、唐の貞觀の帝の蝗こらひをのめりける故事にも劣らざりけり。

能因は、いたれるすきものにてありければ、

都をば霞とともに立ちしかど

秋風ぞふく白川の關

とよめるを、都にありながらこの歌を出ださんこと念なしと思ひて、人にもしらせず、ひさしく籠り居て、色をくろく日にあたりなし

貞觀の帝  
唐の太宗。

て後、陸奥の國の方へ修行のついでによみたりとぞ披露し侍りける。  
(巻五)

五 足柄山の祕曲

源義光は、豊原時元が弟子なり。時秋いまだ幼かりける時、時元はうせにければ、大食調入調の曲をば、時秋には授けず、義光には慥かに教へたりけり。陸奥守義家朝臣、武衡家衡等を攻めける時、義光は京に候ひて、かの合戦の事を傳へ聞きけり。暇を申して下らんとしけるを、御ゆるしなかりければ、兵衛尉を辭し申して陣に弦袋をかけて馳下りけり。近江の國鏡の宿に着く日、花田の單狩衣に青袴着て、引入烏帽子したる男、おくれじと馳來るあり。あやしう思ひて見れば、豊原時秋なりけり。「あれはいかに。何しに來りた

豊原時元  
樂人、堀河天皇の頃の人。  
時秋  
時元の子。  
陸奥守義家  
義光の兄。

足柄山  
相模國足柄郡

るぞ。」と問ひければ、とかくの事はいはず、たゞ「御供仕るべし。」とばかりぞいひける。義光、この度の下向ものさわがしき事侍りて馳下るなり。伴ひ給はん事尤も本意なれども、此の度におきては然るべからず、としきりにとむむるを聞かず、強ひて従ひけり。力及ばず諸共に下りて、遂に足柄の山まで來りけり。かの山にて、義光馬を控へてはいはく、止め申せども用ひたまはで、これまで伴ひ給へる事、その志あさからず。さりながら、この山には、定めて關もきびしくて、たやすく通す事もあらじ。義光は所職を辭し申して、都を出てしより、命をなきものにな



豊原時秋

して罷り向へば、いかに關嚴しくとも憚るまじ、駈破りて罷り通るべし。それにはその用なし、速かに是より歸り給へ」といふを、時秋猶承引せず。又いふこともなし。その時義光、時秋が思ふ所を悟りて、のどかに打寄りて、馬よりおりぬ。人を遠くのけて、柴を切拂ひて、楯二枚を敷きて、一枚には我が身座し、一枚には時秋をすゑけり。鞞うづまより一紙の文書を取立てて、時秋に見せけり。父時元が自筆に書きたる、大食調入調の曲の譜なり。又笙はありや」と時秋に問ひければ、「候ふ」とて、懷より取出したりける用意のほど、先づいみじくぞ侍りける。その時、是まで慕ひ來れる志、定めてこの料にてぞ侍らんとて、即ち入調の曲を授けてけり。「義光はかゝる大事によりて下れば、身の安否知りがたし。萬が一安穩ならば、都の見參を期すべし。貴殿は豊原數代の樂工、朝家要須の仁なり。我に志

をおぼさば、速かに歸洛して道を全うせらるべし」と再三いひければ、理に折れてそのほりける。(卷六)

六 頼光朝臣

頼光・頼信  
源満仲  
頼光  
公時  
頼光の臣、坂田公時。

頼光朝臣、寒夜に物へありきて歸りけるに、頼信の家近くよりたれば、公時を使にて、只今こそ罷り過ぎ侍れ。此の寒さこそ、はしたなけれ。美酒侍りや」といひたりければ、頼信朝臣、折ふし酒飲みて居たりける時なりければ、興に入りて、只今見んやうに申し給ふべし。この仰事によるこび思ひ給へ候。御渡りあるべし」といひければ、頼光則ち入りにけり。

盃酌の間、頼光廐の方を見やりたりければ、童を一人いましておきたりけり。あやしと見て、頼信に、あれにいましめておきたるも



鬼童丸  
有名の山賊。

のはたぞ。と問ひければ、鬼童丸なり。とこたふ。頼光驚きて、いかに鬼童丸などをあれていにはいましめ置き給ひたるぞ。をかしかるものなれば、かくほどあだにはあるまじきものを。といはれければ、頼信、實にさる事候。とて、郎等と呼びて、猶したゝかにいましめさせければ、金鎖かなぐさりをとり出でて、能く逃げぬやうにしたゝめけり。鬼童丸、頼光宣ふ事を聞くより、口惜しきものかな、何ともあれ、夜のうちに、この恨をばむくいんずるものと思ひ居たりけり。盃酌數獻になりて、頼光も酔ひて臥しぬ。頼信も入りにけり。

夜ふけしづまる程に、鬼童丸究竟のものにて、いましめたる金鎖ふみ切りて遁れ出でぬ。狐戸より入りて、頼光の寝たる天井の上にある。この天井引きはなちて落ちかゝりなば、勝負すべき事異儀あらじと思ひためらふ程に頼光も、たゞ人にあらねば、早くさとりにけり。

綱  
頼光の臣、渡邊綱。

にけり。落ちかゝりなば大事と思ひて、天井にいたちよりも大きに、貂てんよりも小さきものの音こそすれ。といひて、誰か候。と呼びければ、綱、名のりて参りけり。明日は、鞍馬へまゐるべし。いまだ夜をこめて、是よりやがて参らんずるぞ。某々供すべし。といはれければ、綱承りて、皆是に候。と申してゐたり。

鬼童丸この事を聞きて、こゝにては今は叶ふまじ。酔ひ臥したらばとこそ思ひつれ、なまさかしきことしいては、悪しかりなんと思ひて、明日の鞍馬の道にてこそと思ひかへして、天井をのがれ出でて、鞍馬のかたへ向ひて、市原野いちばらのの邊にて、便宜の所をもとむるに、立ちかくるべき所なし。野飼の牛のあまたありける中に、殊に大きなるを殺して、路次に引きふせて、牛の腹をかきやぶりてその中に入りて、目ばかり見出して待ちけり。頼光、案の如く來りけり。

鞍馬  
京都の北方約四里の處にある山。  
市原野  
京都から鞍馬への途中にある。

定通・季武  
共に平氏。前  
にあつた公  
時・綱を合せ  
て頼光の四天  
王といふ。

淨衣に太刀をぞはきたりける。綱公時・定通・季武等、皆共にありけり。頼光馬をひかへて、野のけしき興あり。牛その數あり。おのおの牛追ふものあらばや、といはれければ、四天王のともがら、我も我もとかけて射けり。誠に興ありてぞ見えける。その中に、綱いかゞ思ひけん、とがり箭をぬきて、死にたる牛にむかひて、弓を引きけり。人あやしと見る所に、牛の腹のほどをさして、矢をはなちたるに、死にたる牛ゆすくとはたらきて、腹の内より、大の童打刀をぬきて走り出で、頼光にかゝりけり。見れば、鬼童丸なりけり。矢を射たてられながら、猶事ともせず、敵に向ひけり。頼光は少しもさわがず、太刀をぬきて、鬼童丸が頭を打ちおとしてけり。やがてもたふれず、打刀を抜きて、鞍のまへつわを突きたり。さて頭はむながいにくひつきたりけりとなん。死ぬるまで猛くいかめしう

侍りけるよし、語りつたへたり。まことなることにや。さて頼光はそれより歸りにけり。(卷九)

七 衣のたて

伊豫守源頼義朝臣、貞任・宗任等をせむる間、陸奥に十二年の春秋を送りけり。鎮守府をたちて、秋田の城にうつりけるに、雪ふりて、軍のをのこどもの鎧、皆白妙になりけり。衣川の館、岸高く川ありければ、楯をいたゞきて、冑にかさね、筏をくみて、攻め戦ふに、貞任等堪へずして、遂に城の後よりのがれ落ちけり。一男八幡太郎義家、衣川に追ひたて、攻めふせて、きたなくも後をば見するものかな。しばし引きかへせ、物いはん、といはれたりければ、貞任見かへりたりけるに、

貞任・宗任  
安倍氏。  
鎮守府  
陸中國膽澤郡  
膽澤城。今宇  
佐村に遺址が  
ある。  
衣川の館  
同國同郡衣川  
村。

「衣のたてはほころびにけり」といへりけり。貞任、くつばみをやすらへ、しころをふりむけて、年を経し絲のみだれのくるしさに

とつれたりけり。その時義家はげたる箭をさしはづして歸りにけり。さばかりのたゝかひの中に、やさしかりけることかな。

同朝臣十二年の合戦の後、宇治殿へ参りて、戦の間の物語申しけるを、匡房卿よく聞きて、器量はかき武者なれども、なほ軍の道をばしらぬ」と、獨言にいはれけるを、義家の郎等聞きて、けやけきことを宣ふ人かなとおもひたりけり。さるほどに江帥出でられけるに、やがて義家も出でけるに、郎等、かゝる事をこそ宣ひつれ」と語りければ、定めて様あらん」といひて、車に乗られける所へ、すゝみよりて會釋せられけり。やがて弟子になりて、それより常にまう

宇治殿

關白藤原頼通

匡房

大江氏

江帥

大江匡房

てて學問せられけり。

その後寛治の合戦の時、金澤の城をせめけるに、一列の鴈飛去りて、荻田の面におりんとしけるが、俄かにおどろきて、つらをみだりて飛びかへりけるを、將軍怪しみて、くつばみをおさへて、先年江帥の教へ給へる事あり。それ軍野に伏す時は、飛鴈つらをやぶる。この野に必ず敵伏したるべし」とて、からめ手をまはすべきよし下知せらるれば、手を分ちて三方をまく時、案の如く、三百餘騎をかくしおきたりけり。兩陣みだれあひて戦ふことかぎりな

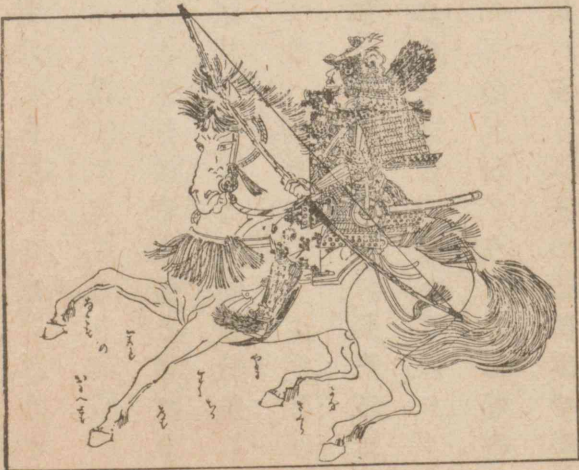
寛治の合戦

後三年の役

金澤の城

羽後國仙北郡

金澤町



源 義 家

し。されどもかねてさとりぬる事なれば、將軍の軍勝に乗じて、武衡等が軍やぶれにけり。「江帥の一言なからましかば、あぶなからまし」とぞいはれける。

十二年の合戦に、貞任は討たれにけり。宗任は降人になりて來にければ、ゆるして使ひけり。嫡男義家朝臣のもとに朝夕祇候しけり。或日義家朝臣、宗任一人を具して、物へ行きけり。主従共に狩装束にて、うつぼをぞおへりける。廣き野を過ぐるに、狐一疋走りけり。義家うつぼよりかりまたをぬきて、狐をおひかけけり。射殺さんはむざんなりと思ひて、左右の耳の間をすりざまに、尻へ射たりければ、箭は狐の前の土にたちにけり。狐その箭にふせがれて、たふれて、やがて死にけり。宗任馬よりおりて、狐をひきあげて見るに、箭もたゝぬに死にたれば、そのことをいふに、義家見て、臆し

て死にたるなり。殺さじとてこそ射はあてね。今いきかへりなん。その時放つべし」といひけり。則ち箭をとりてまゐらせければ、やがて宗任して、うつぼにさゝせ給ひけり。他の郎等是を見て、「あぶなくもおはするものかな。降人に参りたりとも、本の意趣は残りたらんものを、脇をそらして矢をさゝする事、あぶなきことなり。思ひきる害心もあらばいかゞ」とぞかたぶきける。(卷九)

八 金岡の馬

巨 仁和寺の御室といふは、寛平法皇の御在所なり。その御所に、金岡筆をふるひて、繪書ける中に、殊にすぐれたる馬形なん侍



仁和寺の御室  
山城國葛野郡  
花園村にある  
寛平法皇  
宇多法皇  
金岡  
巨勢金岡。宇  
多法皇の頃の  
畫家。

るなる。その馬、夜な／＼はなれて、近邊の田をくらひけり。なに  
もののすると、知れるものなくて、過ぎ侍りけるほどに、件の馬の足  
に土つき、ぬれ／＼とあること、たび／＼に及びける時、人々あやし  
みて、この馬のしわざにやとて、壁に書きたる馬の目をほりくじり  
てけり。それよりまなこなくなりて、田を食ふこととゞまりにけ  
り。(卷十二)

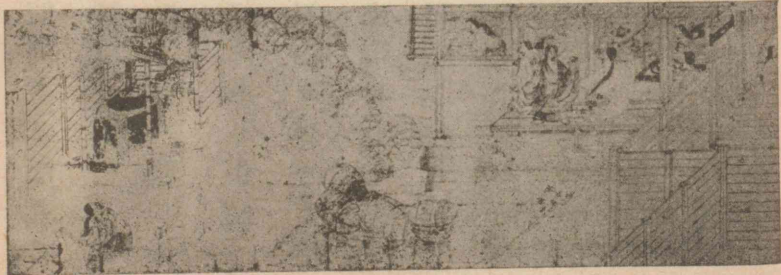
九 鳥羽僧正

鳥羽僧正は、近き世には並びなき繪かきなり。法勝寺金堂の扉の  
繪かきたる人なり。いつ程のことにか、供米不法の事ありける時、  
繪にかゝれける。辻風の吹きたるに、米の俵をおほく吹上げたる  
が、塵灰の如くに空にあがるを、大童子、法師原はしりより、取りとゞ

鳥羽僧正  
平安朝末期の  
畫僧。今昔物  
語の著者源隆  
國の子。  
法勝寺  
白河天皇の建  
立。京都の東  
北郊白川村に  
あつた。

めんとしたるを、さまざまにおもしろう筆をふ  
るひてかかれけるを、誰かしたりけん、その繪を  
院御覽じて御入興ありけり。その心を僧正に  
御尋ねありければ、あまりに供米不法に候ひて、  
實の物は入り候はで、糟糠のみ入りて軽く候ゆ  
ゑに、辻風に吹上げられ候を、さりとてはとて、小  
法師原が取りとゞめんとし候がをかしう候を、  
かきて候。と申されければ、比興の事なりとて、そ  
れより供米の沙汰きびしくなりて、不法の事な  
かりけり。(卷十二)

一〇 釜ぬすびと



之 俵 圖

兼光  
藤原氏。  
建久  
後鳥羽天皇の  
朝、後白河法  
皇院政の時。

大理  
檢非違使別當  
の唐名。

中納言兼光卿、建久二年十二月廿八日に、檢非違使別當になりて、廳務殊におこし、沙汰ありけるに、賤しき者の小屋に小さき釜のうせたりけるを、隣なりける腰居が盗みたりけりとして、贓物を搜し出したりけるに、腰居申しけるは、手をもちてこそゐざりありき候へ。手をはなれてはいかでか取り侍るべき。他人ぞ盗みおきて侍らん。と陳じければ、まことに申す所理なり。と沙汰ありけれど、盗まれたる者の訴訟強くて、大理の門前に召出して、内問ありけり。爭論事ゆかざりけるに、別當謀をめぐらして、この腰居申す所不便なり。只この釜を腰居にとらすべし。と仰せ下したりければ、腰居悦びて、頭にうちかづきて、いざり出でけるを見て、實犯なりけり、かたはの身なれどもかくして盗みてけるとさととりて、科に行はれけり。ゆゆしかりけるはかりごとなり。(卷十二)

#### 四 宇治拾遺物語

十五卷。古今の逸話奇聞等百九十六條を集録したるものにして、多くは今昔物語所載のものを採り別に十餘の説話を加へたるのみ。順徳天皇の建保四年の作なるべしといふ。著者は不明なり。

##### 一 袴垂保昌に逢ふ事

昔、袴垂<sup>はかまだれ</sup>とていみじき盗人の大將軍ありけり。十月ばかりに衣の用ありければ、衣少しまうげんとて、さるべき所々窺ひありきけるに、夜中ばかりに、人皆しづまりはてて後、月の朧なるに、衣數多着たりける主の、指貫のそばはさみて、衣の狩衣めきたるを着て、唯一人笛吹きて行きもやらずねりゆけば、あはれこれこそ我に衣得させ

んとて出でたる人なんめれと思ひて、走りかゝり衣を剥がんと思ふに、怪しく物の恐ろしく覺えければ、添ひて二三町ばかり往けども、我に人こそ附きたれと思ひたる氣色もなし。いよ／＼笛を吹きて往けば、試みんと思ひて、足を高くして走り寄りたるに、笛を吹きながら見かへりたる氣色、取りかゝるべくも覺えざりければ、走り退きぬ。斯様に數多度、とさまかうさまにするに、露ばかりも騒ぎたる氣色なし。希有の人かなと思ひて、十餘町ばかり具して行く。さりとしてあらんやと思ひて、刀を抜きて走りかゝりたる時に、そのたび笛を吹止みて、立返りて、「こは何者ぞ」と問ふに、心も失せて、我にもあらでついゐられぬ。又、いかなる者ぞ」と問へば、今は逃ぐともよも逃がさじと覺えければ、引剝にさぶらふ」といふ。「何者ぞ」と問へば、宇袴垂となんいはれさぶらふ」と答ふるに、「さいふ者ありと聞くぞ。危ふげに、希有の奴かな」といひて、共にまうで」とばかりいひかけて、又同じやうに笛吹きて行く。此の人の氣色、今は逃ぐともよも逃がさじと覺えければ、鬼に肝取られたるやうにて共に行く程に、家に行着きぬ。何所ぞと思へば、攝津前司保昌といふ人なりけり。家の内に呼入れて、綿厚き衣一つを賜はりて、衣の用あらん時は参りて申せ。心も知らざらん人に取りかゝりて、汝あやまちすな」とありしこそ、あさましくむくつけく恐ろしかりしか。いみじかりし人の有様なりと、捕へられて後語りけり。(第二)

保昌  
藤原氏。

元輔  
清原氏、清少  
納言の父。

二 元輔落馬の事

今は昔、歌よみの元輔、内藏助になりて、賀茂祭の使しけるに、一條大路わたりけるほどに、殿上人の車多く列べ立てて物見ける前渡る

程に、おいらかにてはわたらで、人見給ふにと思ひて、馬を痛くあぶりければ、馬狂ひて落ちぬ。年老いたる者の頭をさかさまにて落ちぬ。公達あなみじと見る程に、いと疾く起きぬれば、冠ぬげにけり。髻つゆなし。たゞ銜はしをかづきたる様にてなんありける。馬ぞひ手まどひをして、冠を取りて着さすれど、後うしろさまにかきて、あな騒がし、暫し待て。公達に聞ゆべき事ありとて、殿上人どもの車の前に歩みよる。日のさしたるに、頭きらくとして、いみじう見ぐるし。大路の者、市をなして笑ひ詈る事限なし。車棧敷の者ども笑ひ詈るに、一つの車の方さまに歩みよりていふやう、公達、この馬より落ちて冠落したるをば、をこなりとや思ひ給ふ。しか思ひ給ふまじ。その故は、心ばせある人だにも、物に躓き倒るゝ事は常の事なり。まして馬は心あるものにあらず。この大路はいみじ

う石高し。馬は口をはりたれば、歩まんと思ふだに歩まれず。とひきかうひきくるめかせば、倒れなんとす。馬を悪しと思ふべきにあらず。唐鞍はさならり、ものかゝふべくもあらず。それに馬は痛く躓けば落ちぬ。それわろからず。又冠の落つる事は、物してゆふものにあらず、髪を能くかさ入れたるに捕へらるゝものなり。それに髪は失せにたればひたぶるになし。されば落ちんこと、冠怨むべきやうもなし。又例なきにあらず。何の大臣は大嘗會の御襖に落つ。何の中納言は





その時の行幸に落つ。かくの如く、例も考へやるべからず。然れば、案内も知り給はぬ此の頃の若き公達笑ひ給ふべきにあらず。笑ひ給はば、かへりてをこなるべし。とて、車ごとに、手を折りつゝ、數へて言ひ聞かす。かくの如く言ひはてて、冠持て來。といひてなん取りてさし入れける。その時にとよみて笑ひ置ること限なし。冠せさすとて、馬ぞひのいはく、落ち給ふ即ち冠を奉らで、などかくよしなしごとは仰せらるゝぞ。と問ひければ、痴事しんごとないひそ。かく道理をいひ聞かせたらばこそ、この公達は後々にも笑はざらめ。さらずば口さがなき公達は、長く笑ひなんものをや。とぞいひける。人わらはする事役にするなりけり。 (第十三)

### 五 増 鏡

十卷。一條兼良の作といひ、或は一條冬良等の作といひ、詳かならず。後鳥羽院の御治世より後醍醐天皇の元弘三年までの事を記せる歴史物語なり。世に水鏡大鏡と併せて三鏡と稱す。著作の年代詳かならず。されども、吉野朝頃の作なるべしといふ。

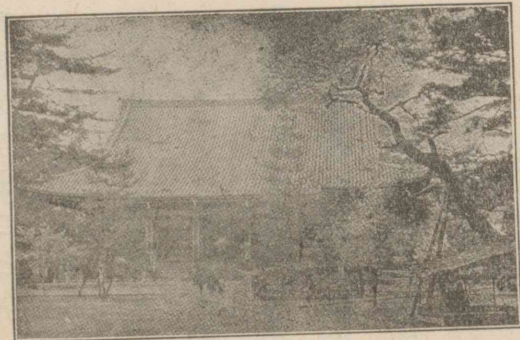
#### 一 序

如月の中の五日は、鶴の林に薪盡きにし日なれば、かの如來二傳の御かたみのむつまじさに、嵯峨の清涼寺にまうでて常在靈鷲山りやうじゆせんなど心のうちに唱へて拜み奉る。傍にやそぢにもや餘りぬらんと見ゆる尼一人、鳩の杖にかゝりて參れり。とばかりありて、たけく思ひ立ちつれど、いと腰いたくて堪へがたし。今宵はこの局にう

鶴の林  
沙羅樹林、即ち釋迦佛入滅の處。  
二傳  
印度より唐土に傳はり更に日本に傳はつたからいふ。  
嵯峨の清涼寺  
山城國葛野郡上巖峨。  
常在靈鷲山  
法華經壽量品の偈の句。

ち休みなん。坊へ行きてみあかしの事など言へ。とて具したる若  
 き女房のつきづきしき程なるをばかへしぬめり。釋迦牟尼佛と  
 たびく申して、夕日の花やかにさし入りたるを打見やりて、あは  
 れにも山の端近く傾きぬめる日影かな。我が身の上のこゝちこ  
 そすれ。とてよりみたるけしき、何となくなまめかしく、心あらんか  
 しと見ゆれば、近く寄りて、いづくより詣で給へるぞ。ありつる人  
 のかへりこん程、御伽せんはいかゞ。などいへば、このわたり近く侍  
 れど、年のつもりにや、いとほるけき心ちし侍る、あはれになん。とい  
 ふ。「さて、も、いくつにかなり給ふらん」と問へば、いさ、よくも我なが  
 ら思ひ給へわかれぬほどになん。百とせにも、こよなく餘り侍り  
 ぬらん。來し方行く先、ためしもありがたかりし世のさわぎにも、  
 この御寺ばかりは恙なくおはします、なほやんごとなき如來の御

光なりかし。などいふも、古代にみやびかなり。



涼 寺

年のほどなど聞くもめづらしき心ちして、かゝる人こそ昔物語も  
 すなれと思ひ出でられて、まめやかに語ら  
 ひつゝ、昔の事の聞かまほしきまゝに、年の  
 清 つもりたらん人もがなと思ひ給ふるに、嬉  
 しきわざかな、少しのたまはせよ。おのづ  
 から古き歌など書きたるものの片はし見  
 るだに、その世に逢へる心ちするぞかし。と  
 いへば、すげみたる口うちほゝゑみて、いか  
 でか聞えん。若かりし世に見聞き侍りし  
 事は、こゝらの年頃に、ぬば玉の夢ばかりだになくおほゝれて、何の  
 わきまへか侍らん。とはいひながら、けしうはあらず、あへなんと思

雲林院  
山城國葛野郡

翁の言の葉

大鏡をいふ。

これは最初の

假名文歴史で

あるから、假

名の日本紀と

いつたのであ

る。

つくと髪物

語

今鏡をいふ。

水鏡

へる氣色なれば、いよ／＼いひはやして、かの雲林院の菩提講に参りありし翁の言の葉をこそ、假字の日本紀にはすめれ。又かの世繼がうまごとかいひしつくも髪物語も、人のもてあつかひぐさになれるは、御ありさまのやうなる人にこそ侍りけめ。なほのたまへ、などすかせば、さは心得べかめれど、いよ／＼口すげみがちにて、そのかみは、げに人の齡もたかく、きもつよかりければ、それに隨ひて、たましひもあきらかにてや、しか聞えつくしけん。あさましき身は、いたづらなる年のみ積れるばかりにて、昨日今日といふばかりの事をだに、目も耳もおぼろになりにて侍れば、ましていと怪しき僻事どもにこそは侍らめ。そもさやうに御覽じ集めけるふる事どもはいかにぞ、といふ。「いさ、たゞおろ／＼見及びしものどもは、水鏡といふにや。神武天皇の御代よりいとあら／＼かに記

神武天皇から  
五十四代仁明  
天皇までのこ  
とを記す。  
四十帖の草紙  
榮華物語。  
なにがしの大  
臣  
源内大臣通親  
であらうとい  
ふ。  
いや世繼  
今傳はらない  
隆信  
藤原氏。後鳥  
羽天皇頃の人

せり。その次には大鏡、文徳のいにしへより後一條の御門まで侍りしにや。又世繼とか四十帖の草紙にぞ、延喜より堀河の先帝までは少しこまやかなる。又なにがしの大臣の書き給へると聞き侍りし今鏡には、後一條より高倉院までありしなめり。まことや、いや世繼は隆信朝臣の後鳥羽院の御位の御程までを記したりとぞ見え侍りし。その後のことなん、いと覺束なくなりける。おぼえ給へらん所々までものたまへ。今宵誰も御伽せん。かゝる人に逢ひ奉れるも、しかるべき御契あらんものぞ、など語らへば、そのかみの事は、いみじうたど／＼しけれど、誠に事のつゞきを聞えざらんも、覺束なかるべければ、たえ／＼に少しなん。僻事ども多からんかし。そはさしなほし給へ。いとかたはらいをきわざにぞ侍るべきかな。かの古き事どもには、なぞらへ給ふまじうなん。

とて、

おろかなる心や見えんます鏡

ふるき姿にたちはおよばて

とわなゝかし出でたるもにくからずいと古代なり。「さらば今の  
たまはん事をも又書き記して、かの昔の面影にひとしからんとこ  
そは思すめれ」といらへて、

今もまた昔をかけばます鏡

ふりぬる代々の跡にかさねん (序)

二 實朝の死

新院の御位のはじめつかた、正治元年正月、頼朝はあづまにて頭お  
ろして、同じき十三日、年五十三にてかくれにけり。

新院  
土御門上皇。

治承四年より天の下にもちひられて、二十年ばかりや過ぎぬらん。  
北の方は、さきに聞えつる北條四郎時政が女なり。その腹にをの  
こ二人あり。太郎をば頼家といふ。弟をば實朝と聞ゆ。大將か  
くれて後、兄はやがて立ち継ぎて、建仁元年六月二十二日、從二位、同  
日將軍の宣旨を賜はる。又の年、左衛門督になさる。かゝれども、  
少しおちぬ心ばへなどありて、やうく兵ども背きくゝにぞな  
りにける。

時政は遠江守といひて、故大將のありし時より私の後見なりしを、  
まいて今はうまごの世なれば、いよく身重く勢そふこと限なく  
て、うけばりたるさまなり。子二人あり。太郎は宗時、次郎は義時  
といへり。次郎は心も猛く魂まされる者にて、左衛門督をばふさ  
はしからずおもひて、弟の實朝の君に付き従ひて、思ひ構ふる事な

故大將  
頼朝。建久元  
年、右近衛大  
將に任ぜられ  
た。

修善寺  
田子郡修善寺村。

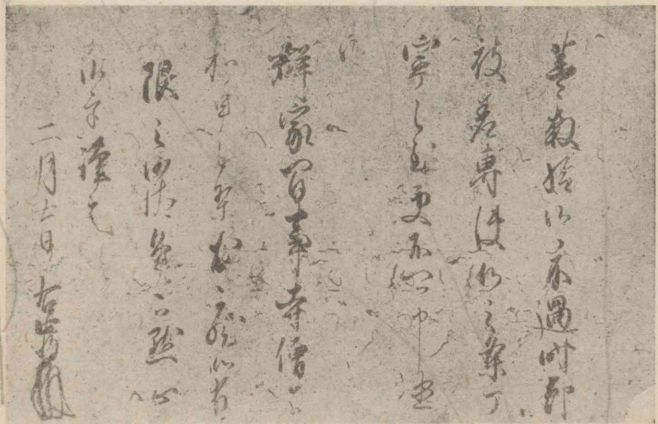
閑院の内裏

京都二條の南西洞院の西一町にあつた。左馬のつかさ左馬寮の御監(イゲン)。御監は頭の上の官。

どもありけり。督は日にそへて人にもそむけられ行くに、いとみじき病をさへして、建仁三年九月十六日、年二十二にて頭おろす。世の中のこり多く、何事もあたらしかるべき程なれば、さこそ口惜しかりけめ。をさなき子の一萬といふにぞ世をば譲りけれど、うけひく者なし。入道はかの病つくろはんとて、鎌倉より伊豆の國へいでゆあびに越えたりける程に、かしこの修善寺といふ處にて遂に討たれぬ。一萬もやがて失はれけり。これは實朝と義時と一つ心にてたばかりけるなるべし。

さて今は偏に實朝故大將の跡をうけつぎて、つかさ位滞ることなく、よろづ心のまゝなり。建保元年二月二十二日正二位せしは、閑院の内裏造れる賞とぞ聞き侍りし。同じき六年權大納言になりて、左大將を兼ねたり。左馬のつかさをぞつけられける。その年

やがて内大臣になりても、猶大將もとのまゝなり。父にもやゝた



ち勝りていみじかりき。この大臣は大方心ばへうるはしく、猛くも優しくもよろづめやすければ、ことわりにも過ぎて武士の靡き従ふさま、父にも超實えたり。いかなる時にかありけん、山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも

とぞ詠みける。時政は建保三年にかくれしかば、義時ぞあとを継ぎける。故左衛門督の子にて、公曉といふ大徳あり、親の討たれにしことを、いかでかやすき

鎌倉に移し奉  
れる八幡  
今の鎌倉鶴岡  
八幡宮。本社  
はもと山城の  
男山八幡を勧  
請したもので  
ある。

心あらん、いかならん時にかとのみ思ひわたるに、この内大臣また  
右大臣にあがりて、大饗など珍しくあづまにて行ふ。京より尊者  
を始め上達部殿上人多くとぶらひいましけり。さて鎌倉に移し  
奉れる八幡の御社に神拜にまうづる、いといかめしき響なれば、國  
の武士はさらにもいはず、都の人々も扈從しけり。たち騒ぎの  
のしる者、見る人も多かるなかに、かの大徳うち紛れて女のまねを  
して、白き薄衣ひきををり、大臣の車よりおるゝ程をさしのぞくやう  
にぞ見えける、あやまたず首を打落しぬ。その程のとよみ、いみじ  
さ思ひやりぬべし。かくいふは承久元年正月二十七日なり。そ  
こらつどひ集まれるものども、たゞあきれたるより外のことなし。  
京にも聞召しおどろく。世の中火をけちたるさまなり。扈從に  
西園寺の宰相中將實氏も下り給ひき。さならぬ人々も泣くく

袖をしぼりてぞ上りける。(新島もり)

三 泰時の出發

さても院の思し構ふる事、忍ぶとすれどやうく漏れ聞えて、東さ  
まにもその心づかひすべかめり。あづまの代官にて伊賀の判官  
光季といふものあり。かつくかれを御かうじのよし仰せらる  
れば、御方に參るつはものども押寄せたるに、遁るべきやうなくて  
腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院は思召しける。

あづまにもいみじうあわて騒ぐ。「さるべくて身の失すべき時に  
こそあなれ」と思ふものから、討手の攻め來りなん時に、はかなきさ  
まにて屍を曝さじ。おほやけと聞ゆとも、みづからし給ふ事なら  
ねば、且は我が身の宿世をも見るばかり」と思ひなりて、弟の時房と

院  
後鳥羽上皇。  
あづまの代官  
京都守職。

泰時といふ一男と、二人をかしらとして、雲霞のつはものをたなびかせて都にのほす。

泰時を前にすゑて言ふやう、おのれをこの度都に参らす事は、思ふ所多し。本意の如く清き死にをすべし。人にうしろを見えな人には、親の顔また見るべからず。今を限と思へ。賤しけれども義時君の御爲に後めたき心やはある。されば横さまの死をせん事はあるべからず。心を猛く思へ。おのれ打勝つものならば、再びこの足柄箱根山は越ゆべし。など泣くく、いひ聞かす。「まことにしかなり。また親の顔拜まん事いと危し」と思ひて、泰時も鎧の袖を絞る。かたみに今や限とあはれに心細げなり。

かくて打出でぬるまたの日、思ひかけぬほどに泰時唯一人鞭を上げて馳せ來たり。父胸うちさわぎて、「いかに」と問ふに、「軍のあるべ

きやう、大方のおきてなどをば、仰の如くその心を得侍りぬ。もし道のほとりにも、圖らざるに、辱く鳳輦を先だてて御旗をあげられ、臨幸の嚴重なる事も侍らんに参りあへらば、その時の進退いかゞ侍るべからん。この一事を尋ね申さんとて、一人馳せ侍りき」といふ。義時とばかり打案じて、賢くも問へるをのこかな。その事なり。正に君の御輿に向ひて弓を引くことは、いかゞあらん。さばかりの時は、兜をぬぎ、弓の弦をきりて、偏にかしこまりを申して身を任せ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましたながら、軍兵を賜はせば、命を棄てて千人が一人になるまでも戦ふべし」と言ひも果てぬに、急ぎ立ちにけり。

都にも思しまうけつる事なれば、ものゝふども召しつどへ、宇治勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用意心ことなり。公經の大

公經・能保  
ともに藤原氏

御うまご云々  
公經の孫は頼  
經(鎌倉の將  
軍)。  
義朝 頼朝  
能保 女子

女子  
女子  
公經 頼經  
道家

七條院  
後鳥羽院の御  
母胤子。

忠信  
藤原氏。  
清經  
清親の誤か。

宗家  
宗行の誤か。  
修明門院  
順徳院の御母

重子。  
範茂  
藤原氏。

將一人のみなん、御うまごのこともさる事にて、北方、一條中納言能保といふ人の女なり、その母北方は故大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重く思して、さしいらへもせず、院の御心の輕きこととあぶながり給ふ。

七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信、尾張中將清經、中御門大納言宗家、また修明門院の御はらからの甲斐宰相中將範茂など、つぎ／＼數多聞ゆれど、さのみは記し難し。軍にまじり立つ人々、此の外の上達部にも殿上人にも數多ありき。御修法ども數知らず行はる。やむごとなき顯密の高僧も、かゝる時こそたのもしきわざならぬ。おの／＼心を致してつかうまつる。御みづからもいみじう念ぜさせ給ふ。中院はあかて位をすべり給ひしより、言に出でてこそものし給はねど、世のいと心やましきまゝに、かやう

顯密

顯は天台宗、密は眞言宗。

中院

土御門上皇。

新院

順徳上皇。

の御騒にも、殊にまじらせ給はざめり。新院は同じ御心にて、よろづ軍の事などもおきて仰せられたり。(新島もり)

四 京都の騒擾

いつの年よりも五月雨晴間なくて、富士川・天龍川などえもいはず漲りさわぎで、いかなる龍馬も打渡しがたければ、攻めのぼる武者どももあやしく惱めり。かゝれども遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者も出立つ。その勢六萬餘騎とかや。宇治勢多へ分ち遣す。世の中ひゞきのゝしる様、言の葉も及ばず、まねび難し。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落ちくだり、すべて安げなく騒ぎみちたり。「いかゞあらんと君も御心亂れて思し惑ふ。かねては猛く見えし人々も、まことの際になりぬれば、いと心あわた



六月十日あま  
承久三年六月  
十五日。

本院  
後鳥羽法皇。  
鳥羽殿  
山城國紀伊郡  
上鳥羽村にあ  
つた。  
ものにもなが  
や  
とりかへすも  
のにもがなや  
世の中をあり  
しながらのわ  
が身と思はむ

だしく色を失ひたる様ども、たのもしげなし。六月十日あまりにや、いくばくの戦だになくて、遂に御方の軍敗れぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはん方なくあきれて、上下たゞ物にぞあたり惑ふ。あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍はからひ掟てつゝ、保元の例にや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院宮々、所々におぼし惑ふ事さらなり。本院は隱岐國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日をかざりの御ありき、あさましうあはれなり。「ものにもがなや」と思さるゝもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御年四十に一つ二つや餘らせ給ふらん。まだいとほしかるべき御程なり。信實朝臣召して御姿寫しかゝせらる。七條院へ奉らせ給はんとなり。か

(源氏物語河  
海抄引歌)  
信實朝臣  
藤原氏。似繪  
の名人。

帝  
仲恭天皇。

四十五日云々  
泰の子嬰の故  
事。  
からの書  
史記をさすの  
であらう。



後鳥羽天皇

くて同じき十三日に御船にたてまつりて、遙かなる浪路を凌ぎおはします御心ち、この世の同じ御身ともおぼされず。いみじう、いかなりける世々の報にかとうらめし。新院も佐渡國に遷らせ給ふ。まことや、七月九日、帝をもおろし奉りき。この卯月かたよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にており給へるためしも、これやはじめなるらん。唐土にぞ、四十五日とかや位におはする例ありけりとぞ、からの書讀みし人の言ひし心ちする。それもかやう

の亂やありけん。

さて上達部殿上人、それより下はた残りなく、この事にふれにしたぐひは、重く軽く罪にあたる様いみじげなり。

中院ははじめよりしろしめさぬ事なれば、あづまにも咎め申さねど、父の院遙かに遷らせ給ひぬるに、長閑にて都にてあらん事いとおそれありとおぼされて、御心もてその年閏十月十日土佐國の幡多といふ處に渡らせ給ひぬ。去年の如月ばかりにや、若宮いでき給へり。承明門院の御せうとに通宗の宰相中將とて若くて失せ給ひにし人のむすめの御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家にとゞめ奉り給ひて、近くさぶらひける北面の下藤一人、召次などばかりぞ御供仕うまつりける。いとあやしき御手輿にて下らせ給ふ。道すがら雪かきくらし、風吹荒れ、ふゞきして、來

若宮

邦仁親王即ち

後嵯峨天皇。

源通親

通宗

通子

(後醍醐天皇御母)

定通

通方

承明門院

在子(土御門天皇御母)

し方行くさきも見えず、いと堪へがたきに、御袖もいたく凍りて、わりなき事多かるに、

うき世にはかゝれとてこそ生れけめ

ことわり知らぬ我が涙かな

「せめて近きほどに」とあづまより奏したりければ、後には阿波國にうつらせ給ひにき。(新鳥もり)

五 後嵯峨天皇

さても源大納言通方の預り奉られし阿波院の宮は、おとなび給ふまゝに、御心ばへもいとときやうさくに、御かたちもいとうるはしく、けだかくやんごとなき御有様なれば、なべて世の人もいとあたらしき事に思ひ聞えけり。大納言さへ曆仁の頃失せにしかば、いよ

阿波院の宮

後嵯峨天皇。

曆仁

四條天皇の時  
(一八九九)

橋曇彌  
釋迦の姨母。

承明門院  
土御門天皇の  
御母。阿波院  
の宮の御祖母  
仁治二年  
(一九〇一)  
土御門殿の宮  
阿波院の宮。

いよ真心につかうまつる人もなく、心細げにて何を待つとしもな  
くかゝづらひておはしますも、人わろくあぢきなう思さるべし。  
御母は、土御門の内の大員通親の御子に宰相の中將通宗とて若く  
て失せにし人の御女なり。それさへかくれ給ひにしかば、宰相の  
はらからの姫君ぞ、御乳母のやうにて、橋曇彌の釋迦佛養ひ奉りけ  
ん心ちしておはしける。二つにて父帝に別れ奉り給ひしかば、御  
面影だに覚え給はねど、なほこの世の中におはすと思されしまで  
は、おのづから逢ひ見奉るやうもやなど、人知れず稚き御心にかゝ  
りて思しわたりけるに、十二の御年かよ、かくれさせ給ひぬと傳  
へ聞き給ひし後は、いよく世のうさを思しくんじつゝ、いとまめ  
だちてのみおはしますを、承明門院は心苦しう悲しと見奉り給ふ。  
はかなく明け暮れて、仁治二年にもなりにけり。土御門殿の宮は

城興寺の宮僧  
正眞性  
茂仁王の御子  
天台座主。

女院  
承明門院。  
石清水の社  
山城國綴喜郡  
男山八幡宮。

椿葉の影  
徳是北辰椿葉  
之影再改、尊  
彌南面松花之  
色十廻。(本朝  
文粹、大明朝  
綱)

内の上  
西條天皇。

二十に餘り給ひぬれど、御冠のさたもなし。城興寺の宮僧正眞性  
と聞ゆる、御弟子に、とかたらひ申し給ひければ、さやうにもと思し  
て、女院にもほのめかし申させ給ひけるを、いとあるまじき事との  
み諫め聞えさせ給ふ。その冬の頃、宮いたう忍びて、石清水の社に  
詣でさせ給ひ、御念誦のどかにし給ひて、少しまどろませ給へるに、  
神殿のうち、椿葉の影再び改まる。いとあざやかにけ高き聲に  
てうちずんじ給ふと聞きて、御覽じあげたれば、明方の空澄みわた  
れるに、星の光もげざやかにて、いと神さびたり。いかに見えつる  
御夢ならんと、あやしく思さるれど、人にも宣はず、とまれかくまれ  
と、愈、御學問をぞせさせ給ふ。  
年もかへりぬ。春の初はおしなべて、ほどくにつけたる家々の  
身の祝など、心ゆきほこらしげなるに、むつきの五日より内の上、例

ならぬ御事にて、七日の節會にも御帳にもつかせ給はねば、いとさうざうしく人々思しあへるに、九日の曉かくれさせ給ひぬとてのしり合へる、いとあさましともいふばかりなし。皆人あきれ惑ひて、なか／＼涙だにいでこず。いまだ御つぎもおはしまさず、また御はらからの宮などもわたらせ給はねば、世の中いかになり行かんずるにかと、たどりあへるさまなり。さてしもやはにて、東へぞ告げやりける。

將軍 藤原頼經。  
大殿 藤原道家。  
泰時 義時の子。  
時房 義時の弟。  
若宮の社 鶴岡八幡宮の若宮。

將軍は大殿の御子、今は大納言と聞ゆ。御後見は承久に上りたりし泰時朝臣なり。時房朝臣と一所にて、小弓射させ酒もりなどして心とけたる程なりけるに、京よりのはしり馬といへば、何事ならんと驚きながら、使召寄せて聞くに、いとあさまし。さりとてあるべきならねば、その席よりやがて神事はじめて、若宮の社にて鬨を

ぞとりける。

その程都にはいとうかびたる事ども、心のひき／＼いひしろふ。

佐渡院 順徳院。  
修明門院 順徳院の御母。  
白河 京都賀茂川以東の地。

義景 安達氏。

「佐渡院の宮たちにや」など聞えければ、修明門院にも御心ときめきして、内々その御用意などし給ふ。承明門院も、もしやなど、さまざま御祈し給ふ。あづまの使、都に入るよし聞ゆる日は、兩女院より白河に人を立てて、いづ方へか参ると見せられけるぞ理に、げに今見ゆべき事なれども、物の心もとなきは、さ覺ゆるわざぞかしと、例の口すげみてほゝゑむ。

日ぐらし待たれて、城介義景といふもの三條河原に打出でて、承明門院のおはしますなる院はいづくぞと、かの院より立てられたる青侍の、いとあやしげなるにしも問ひければ、聞く心ち現とも覺えず、しか／＼と申すまゝに、土御門殿へ参りたれど、門は葎つよくか

四辻殿  
修明門院の御  
所  
左大臣  
藤原良實。

ため、扉もさびつき、柱根朽ちてあかざりけるを、郎等どもにとかくせさせて、内に参りて見まはせば、庭には草深く青き苔のみむして、松風より外はこたふるものなく、人の通へる跡もなし。故通宗宰相中將の御弟を子にし給へりし定通のおとゞばかりぞ、何となくおのづからの事もやと思ひて、なえばめる烏帽子直衣にて候ひ給ひけるが、中門に出でて對面し給ふ。義景はきり戸のわきに畏まりてぞ侍りける。「阿波院の御子御位に」と申して出でぬ。院の中の人々、上下夢の心ちして、物にぞあたりまどひける。仁治三年正月十九日の事なり。世の人のこゝち皆驚きあわてて、おしかへし此方にまゐりつどふ馬車のひゞきさわぐ世のおとなひを、四辻殿にはあさましろ、なか／＼物おぼしまさるべし。又の日やがて御元服せさせ給ふ。ひきいれに左大臣まゐり給ふ。理髮、頭辨定嗣

閑院殿  
先帝即ち四條  
天皇の皇后。

つかうまつりけり。御諱邦仁、御年二十三。その夜やがて冷泉萬里小路殿へうつらせ給ひて、閑院殿より劍璽などわたさる。踐祚の儀式いとめでたし。(三神山)

六 持明院殿の蹴鞠

三月  
後宇多天皇弘  
安二年。  
持明院殿  
上立賣の北、  
新町の西。此  
の時後深草院  
の御所。  
新院  
龜山上皇。

三月の末つ方、持明院殿の花盛に、新院わたり給ふ。鞠のかゝり御覽ぜんとなりければ、御前の花は梢も庭もさかりなるに、よその櫻をさへ召してちらし添へられたり。いと深うつもりたる花の白雪、跡つけがたう見ゆ。上達部殿上人いと多く参り集り、



蹴鞠

故院  
後嵯峨院。

本院  
後深草院。  
朱雀院。

三條の北、朱  
雀の西。

春宮  
伏見天皇。

兩院  
後深草・龜山。  
まらうどの院

龜山院。  
久我の太政大  
臣

通光。  
榊櫻  
表蘇芳、裏赤  
花。

山吹  
表薄朽葉、裏  
黄。  
龜山院。

御隨身北面の下臈など、いみじうきらめきて候ひ合へり。わざと  
ならぬ袖口どもおし出されて、心ことに引きつくろはる。寢殿の  
母屋に御座對座ましに設けられたるを、新院入らせ給ひて、故院の御時  
定めおかれしうへは、今更にやは、とて長押の下へひきさげさせ給  
ふほどに、本院出て給ひて、朱雀院の行幸には、あるじの座をこそな  
ほされ侍りけるに、今日の御幸には、御座をおろさるゝいとことや  
うに侍り。など聞え給ふほど、いと面白し。うべくしき御物語は  
すこしにて、花の典にうつりぬ。

御かはらけなどよき程の後、春宮おはしまして、かゝりの下に皆立  
出で給ふ。兩院春宮立たせ給ふ。半過ぐるほどに、まらうどの院  
のぼり給ひて、御したうづなどなほさるゝほどに、女房別當の君、ま  
た上臈だつ久我の太政大臣のうまごとかや、榊櫻の七つ、紅の打衣、

山吹のうはぎ、赤色の唐衣、すゞしの袴にて、しろがねの御盃、柳筥やなぎばこに  
すゑて、同じひさげにて柿ひだし參らすれば、はかなき御たはぶれ



たし。春宮もいと若ううつくしげにて、濃き紫の浮織物の御指貫、  
なよびかに、けしきばかり引きあげ給へれば、花のいと白く散りか  
かりて、紋のやうに見えたるもをか。御覽じあげて一枝おし折

りたまへるほど、繪にかゝまほしき夕ばえどもなり。その後も御  
みきなど、らうがはしきまできこしめしさうどきつゝ、夜更けて歸  
らせたまふ。(老のなみ)

七 元 寇

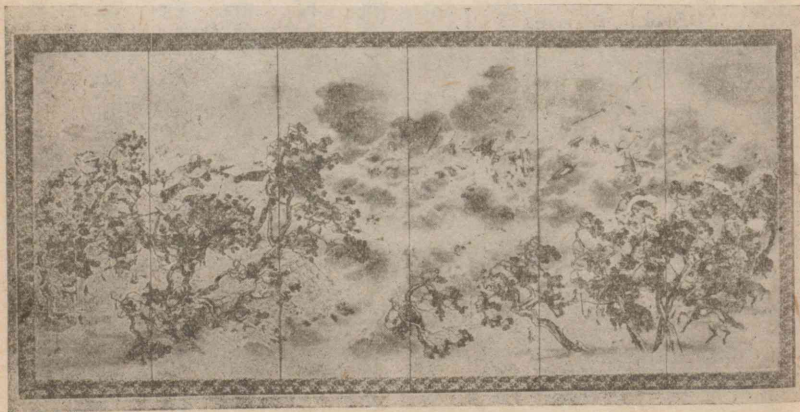
その頃  
弘安四年。  
本院  
後深草院。  
新院  
龜山院。  
内  
後宇多天皇。  
春宮  
伏見天皇。  
經任  
藤原氏。  
西大寺  
奈良の西にあ  
る。

その頃蒙古おこるとかやいひて世の中さわぎ立ちぬ。いろく  
さまくゝに恐ろしう聞ゆれば、本院新院はあづまへ御下りあるべ  
し、内春宮は京にわたらせ給ひて東の武士ども上り候べしなど沙  
汰ありて、山々寺々御祈數知らず。伊勢の勅使に經任大納言まゐ  
る。新院も八幡へ御幸なりて、西大寺の長老召されて眞讀の大般  
若供養せらる。大神宮へ御願に、我が御代にしもかゝる亂出て來  
て、誠にこの日本のそこなはるべくば、御命を召すべきよし御手づ

大般若  
六百卷。唐玄  
非譯。  
大宮院  
後嵯峨の皇后  
龜山上皇の御  
母。御名姑子。  
故院の御代  
後嵯峨天皇の  
文永五年。

から書かせ給ひけるを、大宮院いとあ  
さましき事なり。となほ諫め聞えさせ  
給ふぞ、ことわりにあはれなる。東に  
も言ひ知らぬ祈どもこちたくのゝし  
る。故院の御代にも、御賀の試樂の頃  
かゝる大事ありしかど程なくこそし  
づまりにしを、この度はいとにがく  
しう、牒状とかやもちて參れる人など  
ありて、わづらはしう聞ゆれば、上下思  
ひ惑ふこと限なし。

されども七月一日、夥しき大風吹きて、  
異國の船六萬艘、兵乗りて筑紫へより



來 襲 古 蒙

爲氏  
藤原氏。

たる、皆吹き破られぬれば、或は水に沈み、おのづから残れるも泣く泣く本國へ歸りにけり。石清水の社にて大般若供養説法いみじかりける刻限に、晴れたる空に黒雲一むら俄かに見えてたなびくかの雲の中より白き羽にてはぎたるかぶら矢の大いなる、西を指して飛出でて鳴る音おびたゞしかりければ、彼處には大風の吹きくると兵の耳には聞えて、浪荒く立ち、海の上あさましくなりて、皆沈みにけりとぞ。なほ我が國に神のおはします事あらたに侍りけるにこそ。さて爲氏の大納言伊勢の勅使にてのぼる道より申しおくりける、

勅をしていのるしるしの神風に

寄せくる浪ぞかつくだけつる

かくて静まりぬれば、京にも東にも御心どもおちるて、めでたさか

ぎりなし。かの異國の帝心うしとおほして湯水をも召さず、われいかにもしてこの度日本の帝王にうまれて、かの國をほろぼす身とならん」とぞちかひて死に給ひけるとぞ聞き侍りし。まことにやありけん。(老のなみ)

八 萩の戸の御歌合

院にも内にもあさまつりごとのひまには、御歌合のみしげう聞えし中に、元亨元年八月十五夜かとお、常より殊に月おもしろかりしに、上、萩の戸に出でさせ給ひて、ことなる御遊などもあらまほしげなる夜なれど、春日の御榊うつし殿におはします頃にて、絲竹のしらは折悪しければ、例の只内々御歌合あるべしとて、侍從の中納言爲藤召されて、俄かに題たてまつる。殿上に候ふかぎり、左右同

院  
後宇多院。  
内  
後醍醐天皇。  
元亨元年  
(一九八一)  
上  
後醍醐天皇。  
萩の戸  
清涼殿夜の御殿の北にあつて又菊の戸ともいつた。



春日の御神  
春日大明神の  
神靈のやどり  
ます神。  
爲藤  
藤原氏。

安福殿  
承明門内の西  
にあつて、春  
興殿と相對す  
無名門  
殿上の間から  
小板敷を下り  
て紫宸殿に至  
る土廊にある

右近の陣  
校書殿と安福  
殿との間なる  
月華門の中に  
ある。  
隆資・爲冬  
藤原氏。

じほどの歌よみをえらせ給ふ。左内の上春宮大夫公賢左衛門督公敏侍從中納言爲藤中宮權大夫師賢宰相惟繼昭訓門院の春日右に藤大納言爲世富小路大納言實教洞院中納言季雄公修宰相實任少將内侍忠定朝臣爲冬忠守などいふ醫師もこの道のすきものなりとて召しくはへらる。衛士のたく火も月の名だてにやとて安福殿へ渡らせ給ふ。忠定中將晝の御座の御はかしをとりて參る。殿上のかみの戸を出でさせ給ひて無名門より右近の陣の前を過ぎさせ給へば遣水に月のうつれるいとおもしろし。安福殿の釣殿に床子立てて東面におはします。上達部は簀子の高欄にせなかおしあてつゝ殿上人は庭に候ひ合へるもいとえんなり。池の御船さしよせて左右の講師隆資爲冬乗せらる。御みきなどまゐるさまざまうるはしきことよりは艶になまめかし。人

照る月なみ  
水の上にてる  
月なみをかぞ  
ふれば今宵ぞ  
秋のみなかな  
りける。(源  
順)

景陽の鐘  
時の鐘。景陽  
はもと支那南  
齊武帝の宮中  
にあつた鐘樓  
の名。

人の歌いたくけしきばみてとみにも奉らず。いと心もとなし。照る月なみもくもりなき池の鏡にいはねどしるき秋のなかばげにいとことなる空のけしきに月もかたぶきぬ。明方ちかうなりにけり。うへの御製

鐘の音も傾く月にかこたれて

をしと思ふ夜はこよひなりけり

と講じあげたるほど景陽の鐘もひびきをそへたるをりからいみじうなん。いづれもけしうはあらぬ歌ども多くきこえしが御製の鐘の音にまされるはなかりしにや。かくてことしもまたくれぬ。(秋のみ山)

九 土岐多治見の亂

長月ばかり  
正中元年九月  
十九日。  
土岐十郎  
源頼光の後裔  
土岐頼兼、  
多治見の藏人  
土岐の一族。

資朝・俊基  
藤原氏。  
御門  
後醍醐天皇。

故院  
後宇多院。

その頃長月ばかり、まだしのゝめの程に、世の中いみじくさわぎの  
のしる。「何事にか」と聞けば、美濃國の兵にて土岐の十郎とかや、ま  
た多治見の藏人などいふ者ども忍びのぼりて、四條わたりに立ち  
やどりたる事ありて、人にかくれてをりけるを、早う又告げしらす  
るものありければ、俄かにその所へ六波羅より押寄せて搦め捕る  
なりけり。あらはれぬとや思ひけん、かのものどもはやがて腹切  
りつ。又別當資朝、藏人内記俊基同じやうに武家へとられて、きび  
しくたづねとひ守りさわぐ。事のおこりは、御門世をみだり給は  
んとて、かの武士どもを召したるなりとぞいひあつかふめる。さ  
てその宣旨なしたる人々とて、この二人をもあづまへ下していま  
しむべしとぞ聞ゆる。いかさまなる事の出てくべきにかと、いと  
おそろしくむづかし。「故院おはしましし程は世も長閑にめでた

正應云々  
伏見天皇の正  
應三年三月九  
日に、淺原爲  
頼といふ武士  
が禁中に濫入  
したことをさ  
す。

宣房  
藤原氏。

かりしを、いつしかかやうの事ども出できぬるよ」と人の口やすか  
らざるべし。正應にも淺原といひしさわぎは、後嵯峨院の御そう  
ぶんを東よりひき違へし御恨とこそは聞えしか。今もその御憤  
の名残なるべし。過ぎにし頃、資朝も山伏のまねびして、柿の衣に  
あやみ笠といふもの着て、東の方へ忍びて下れりしは、少しはあや  
しかりし事なり。はやう、かゝる事どもにつけて、あなたさまにも  
宣旨をうくるものありけるなめり。俊基も「紀伊國へゆあみに  
下る」などいひなして、田舎ありきしげかりしも、今ぞ皆人思ひ合せ  
ける。

さるまゝには言ひ知らず聞ゆる事どもあれば、まだきにいと口惜  
しう思されて、この事をまづおだしくやめんとおぼせば、かの正應  
にありしやうなるちかひの御消息をつかはす。宣房の中納言御

親  
資通。

使にてあづまに下る。大かた古き御世よりつかへきて年もたけたる上、この頃は天下にいさぎよくうべくしき人に思はれたる頃なれば、この事更に御門のしろし召さぬよしなどけざやかに言ひなすに、荒き夷どもの心にもいと忝きこととなどみて、無異なるべく奏しけり。この御使の賞にや、宣房大納言になされぬ。いと  
いみじき幸なり。親は三位ばかりにて入道してき。子どもなどさへいと清げにてあまたあめり。さればおほやけはしろし召されぬにても、かの人々は遁るべき方なしとて、別當は佐渡國へ流されぬ。俊基はいかにして遁れぬるにか、都にかへりぬれど、ありしやうには出でつかへず、こもり居たるよしなり。かやうにて、事なく静まりぬれば、いとめでたけれど、上の御心のうちは猶安からず、いかならむ時とのみおもほしわたるべし。(春のわかれ)

一〇 還 御

東寺  
京都九條にある。眞言宗の本山。  
二條の前の大臣  
藤原道平。

六月六日  
元弘三年。

さて都には伯耆よりの還御とて、世の中ひしめく。まづ東寺へ入らせ給ひて、事どもさだめらる。二條の前の大臣召ありて参り給へり。こたみ内裏へ入らせ給ふべき儀、璽しの箱を御身にそへられたれば、たゞ遠き行幸の還御の儀式にてあるべきよし定めらる。關白をおかるまじければ、二條の大臣氏の長者を宣下せられて、都の事管領あるべき由うけたまはる。天の下たゞこの御はからひなるべしとて、このひとつあたり喜びあへり。  
六月六日東寺より、常の行幸のさまにて、内裏へぞ入らせたまひける。めでたしとも言の葉なし。去年の春いみじかりしはやと思しいづるも、たとしへなく、今も御供の武士ども、ありしよりはなほ

名和の又太郎  
名和長年。

いくへともなく打圍み奉れるは、いとむくつけきさまなれど、こたみはうとましくも見えず、たのしくてめでたき御まもりかなと覺ゆるも、うちつけめなるべし。世の習時につけてうつる心なれば、みなさぞあるかし。先陣は二條富の小路の内裏につかせ給ひぬれど、後陣の兵は、なほ東寺の門まで續きひかへたりしとぞ聞えしは、まことにやありけん。正成もつかうまつれり。かの名和の又太郎は伯耆の守になりて、これも衛府のものどもにうちまじりたり。めづらしくさまかはりて、ゆすりみちたる世の氣色かくもありけるを、などあさましくは歎かせ奉りたりけるにかと、めでたきにつけても、なほ前の世のみぞゆかしき。車などたち續きたるさまありし御くだりには、こよなくまされり。もの見ける人の中に、

昔だに沈むうらみをおきの海に

波たちかへる今ぞかしこき

むかしの事など思ひあはするにやありけん。

金剛山なりし東の武士どもも、さながら頭かしを垂れて参りきほふさま、漢のはじめもかくやと見えたり。

禮成門院  
藤原禱子。

禮成門院もまた中宮と聞えさす。六日の夜、やがて内裏へ入らせ給ふ。いにし年御ぐしおろしにき。御惱なほおこたらねば、いっしか五壇の御修法始めらる。八日より議定行はせたまふ。昔の人々のこりなく参りつどふ。

十三日大塔の法親王都に入りたまふ。この月頃に御ぐしおふして、えもいはず清らかなる男になり給へり。からの赤地の錦の御鎧直垂といふもの奉りて、御馬にてわたり給へば、御供にゆゝしげ

季房  
藤原氏。

大納言  
藤原宣房。

なるものゝふども打圍みて、御門の御供なりしにも、ほとく劣るまじかめり。速かに將軍の宣旨をかうぶり給ひぬ。流されし人、人ほどなくきほひのぼるさま、枯れにし木草の春にあへる心ちす。その中に季房の宰相入道のみぞ、預なりけるものの情なき心ばへやありけん、東のひしめきのまぎれに失ひてければ、兄の中納言藤房は歸り上れるにつけても、父の大納言、母の尼うへなど、なげきつきせず、胸あかぬ心ちしてけり。  
四條の中納言隆資といふも頭おろしたりし、また髪おふしぬ。「もとよりちりをいづるにはあらず、かたきのために身を隠さんとして、かりそめに剃りしばかりなれば、今はた更に眉をひらく時になりて男になれらん、何のはばかりかあらん」とぞ、おなじ心なるどちいひあはせける。天台座主にていましし法親王だに、かくおはしま

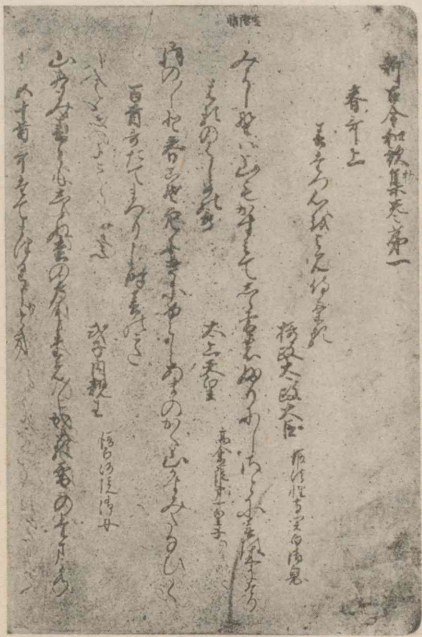
せば、まいてとぞ。誰にかありけん、そのころ聞きし、

すみぞめの色をもかへつ月草の

移ればかはる花のころもに 月草の花

### 六 新古今集

二十卷。後鳥羽院の院宣によりて撰集したるもの。我が國第八の勅撰和歌集にして、撰者は源通具藤原有家藤原定家藤原家隆藤原雅經の五人なり。土御門天皇の元久二年になれり。



新古今集本寫

守覺法親王家五十首歌に

藤原定家朝臣

藤原定家  
俊成の子、新古今集の撰者の一人。

おほ空は梅の匂にかすみつゝ

くもりもはてぬ春の夜の月 (春上)

閑中春雨といふことを

大僧正行慶

つくづくと春の眺の寂しきは

しのぶにつたふ軒の玉みづ (春上)

五十首歌奉りし中に湖上の花を

宮内卿

花さそふ比良の山風ふきにけり

こぎゆく船のあと見ゆるまで (春下)

百首歌奉りし時

皇太后宮大夫俊成

駒とめてなほ水かはむ山吹の

花のつゆそふ井出の玉川 (春下)

百首歌奉りし時

式子内親王

俊成  
藤原氏。後白河天皇の勅によつて千載集を撰む。  
式子内親王  
後白河天皇の皇女。

行慶  
白河天皇の第六皇子、出家して三井寺に住む。

宮内卿  
右京大夫源師光の女。後鳥羽天皇の宮女

源頼政  
世に源三位頼政といふ。

忠良  
藤原氏。基實の子。

寂蓮  
俗名藤原定長俊成の養子であつたが、定家が生れたので自ら出家した。  
曾禰好忠丹後掾であつたので曾丹と稱せられた。

藤原清輔  
父は顯輔。續闘花集の撰者

藤原家隆  
俊成の門人、新古今集撰者の一人。

攝政太政大臣  
藤原良經。

窓ちかき竹の葉すさぶ風のおとに

いとゞみじかきうたゝねの夢 (夏)

夏月を詠める

源 頼 政

庭の面はまだ乾かぬに夕立の

空さりげなくすめる月かな (夏)

千五百番歌合に

前大納言 忠良

夕づく日さすや庵のしばの戸に

さびしくもあるか蛸のこゑ (夏)

題しらず

寂 蓮 法 師

さびしさはその色としもなかりけり

楨たつ山のおきのゆふぐれ (秋上)

題しらず

曾 禰 好 忠

人は來ず風に木の葉は散りはてて

夜なゝゝ虫は聲よわるなり (秋下)

題しらず

藤 原 清 輔 朝 臣

冬がれの森のくちばの霜のうへに

おちたる月の影のさむけさ (冬)

攝政太政大臣家歌合に湖上冬月

藤 原 家 隆 朝 臣

志賀の浦や遠ざかりゆく浪間より

こほりて出づるありあけの月 (冬)

和歌所歌合に關路秋風といふ事を 攝政太政大臣

人すまぬ不破の關やの板びさし

荒れにし後はたゞ秋の風 (雜上)

### 七 徒然草

二冊。吉田兼好の著。著者の見聞感想等を書き綴りたる隨筆なり。文は概ね短く、凡て二百四十三段あり。思想は儒佛老莊を混和して頗る深奥なり。後醍醐天皇の建武頃の作なるべし。

吉田兼好は、後宇多上皇に仕へて左兵衛尉となり、上皇崩御の後出家して兼好法師といふ。又和歌を善くし、當時の四天王の一なり。正平五年歿す、年六十八。

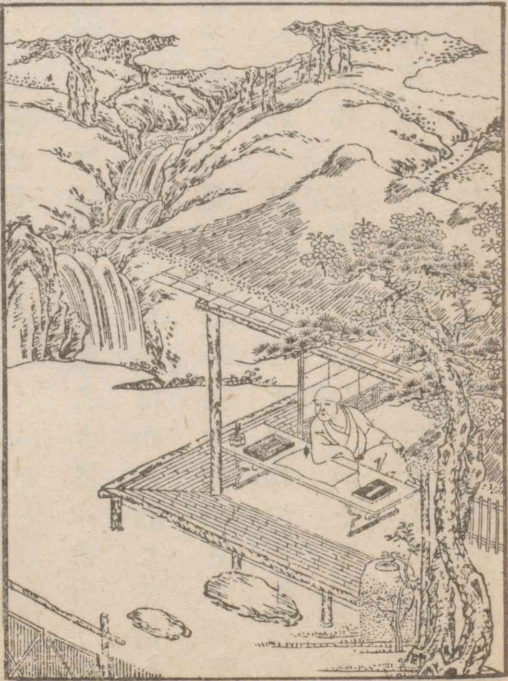
#### 一 つれづれなるまゝに

つれづれなるまゝに、日ぐらし硯にむかひて心にうつり行くよしなしごとを、そこはかとなくかきつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

竹の園生  
梁孝王修竹園  
の故事。

一人  
無政關白。

いでや、この世に生れては、願はしかるべきことこそおほかめれ。みかどの御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで人間の種ならぬぞやんごとなき。一人の御有



兼好法師

様はさらなり、たゞ人も舍人など賜はる際はゆゑしと見ゆ。その子、うまごまでは、はふれにたれど猶なまめかし。それより下つか

ふ  
かたし、まか物ぢんをまあ  
みのわんや春ははくし

兼好筆



たは、程につけつゝ、時に逢ひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いとくち惜し。

法師ばかり羨ましからぬ者はあらじ。「人には木のはしのやうに思はるゝよ」と、清少納言がかけるも、げにさる事ぞかし。勢猛にののしりたるにつけて、いみじとは見えず。

人はかたち有様の優れたらんこそあらまほしかるべけれ。物うちいひたる聞きにくからず、愛敬ありて、詞おほからぬこそ、飽かずむかはまほしけれ。めでたしと見る人の、心劣りせらるゝ本性見えんこそ、くち惜しかるべけれ。品かたちこそ生れつきたらめ、心はなどか賢きより賢きにも移さば移らざらん。かたち心さまよき人も、ざえなくなりぬれば、品くんだり顔にくさげなる人にも立ちまじりて、かけずけおさるゝこそ、本意なきわざなれ。

木のはし云々  
思はん子を法師になしたらんこそ心苦しけれ。さるはいと頼もしき業を、只木の端などの様に思へるこそいといとほしけれ。(枕草子)  
清少納言  
一條天皇の皇后に仕へた女官。

ありたきことは、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、また有職に公事のかた、人のかゝみならんこそいみじかるべけれ。(第一段)

二 家居のつきくしく

家居のつきくしくあらまほしきこそ、假の宿りとは思へど、興あるものなれ。

よき人の長閑に住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、一きはしみくくと見ゆるぞかし。今めかしくきらゝかならねど、木立もふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子透垣のたよりをかしく、うちある調度も、昔おぼえて安らかなるこそ心にくしと見ゆれ。

多くのたくみの、心を盡してみがき立て、唐の、大和の、珍しく得なら

ぬ調度どもならべ置き、前裁まえざいの草木まで、心のまゝならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやは長らへ住むべき、又時の間の煙ともなりなんとぞ、打見るよ  
り思はるゝ。大方は家居にこそことざ  
まは推しはからるれ。

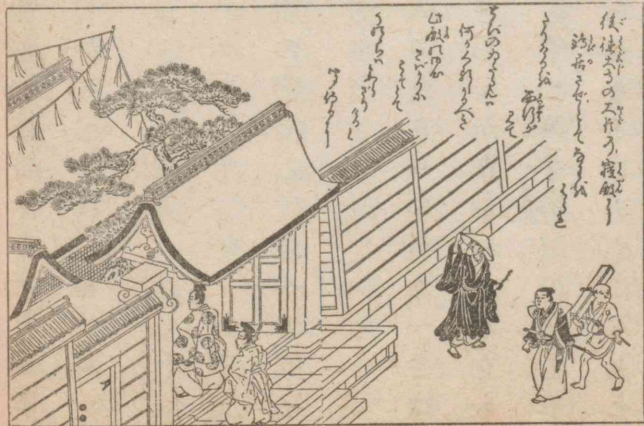
後徳大寺の大臣おきの、寢殿に鳶居させじとて、繩を張られたりけるを西行が見て、鳶の居たらん、何かは苦しかるべき。この殿の御心さばかりにこそ、とて、其の後は、參らざりけると聞き侍るに、綾小路の宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩を引かれたりしかば、かのためし思ひ出

後徳大寺の大臣云々

この話は古今著聞集に出てゐる。

綾小路の宮

性恵法親王子。龜山天皇の皇子。



でられ侍りしに、まことや、鳥のむれ居て、池の蛙をとりければ、御覽じ悲しませ給ひてなんと、人の語りしこそ、さてはいみじくこそと覺えしか。後徳大寺にも如何なる故か侍りけん。(第十段)

三 同じ心ならん人と

同じ心ならん人と、しめやかに物語して、をかしき事も、世のはかなき事も、うらなく言ひ慰まんこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければ、つゆ違はざらんとむかひ居たらんは、ひとりある心地やせん。

互に言はんほどの事をば、げにと聞くかひあるものから、いさゝかたがふ所もあらん人こそ、我はさやは思ふなど、争ひにくみ、さるからさぞ、とも打語らはば、つれづれ慰まめと思へど、げには少しかこ

つ方も、我と等しからざらん人は、大方のよしなしごと言はん程こそあらめ、まめやかかの心の友には、遙かにへだたる所のありぬべきぞわびしきや。(第十二段)

四 しばしの旅

いづくにもあれ、しばし旅立ちたるこそ目さむる心地すれ。そのわたりこゝかしこ見ありき、田舎びたるところ、山里などは、いと目馴れぬ事のみぞおほかる。都へたより求めて文やる、その事かの事便宜に忘るな、などいひやる。こそをかしけれ。さやうの處にてこそ、よろづに心づかひせらるれ。もてる調度まで善きは善く、能ある人も常よりはをかしとこそ見ゆれ。寺社などに忍びて籠りたるもをかし。(第十五段)

五 飛鳥川の淵瀬

飛鳥川 大和國高市郡 畝傍山の東を北に流れる。  
「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞ今日は瀬になる。」

桃李ものいはねば云々  
(古今集)

桃李不<sub>レ</sub>言春 幾暮、烟霞無<sub>レ</sub> 跡昔誰栖。  
(和漢朗詠集)

京極殿 京都土御門の南、京極の西にあつた藤原道長の住所。  
法成寺 京都の五條河

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、たのしびかなしび行きかひて、華やかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、變らぬすみかは人改まりぬ。桃李ものいはねば、誰と共に昔を語らん。まして見ぬ古のやんどとなかりけん跡のみぞ、いとほかなき。京極殿法成寺など見るこそ、志とゞまり事變じにけるさまはあはれなれ。御堂殿の作りみがかせ給ひて、庄園多く寄せられ、我が御族のみ、帝の御後見、世のかためにて、行末までと思し置きし時、いかならん世にも、かばかりあせ果てんとは思してんや。大門金堂など、近くまで有りしかど、正和の頃南門は焼けぬ。金堂は、其の後倒れ伏したるまゝにて、取立つるわざもなし。無量壽院ばかりぞ、其

原にあつたといふ。道長入道してこゝに住んだ。御堂殿。藤原道長。正和。花園天皇の御代。道長薨後二百八十年。行成。藤原氏。三蹟の一人。兼行。源氏。

のかたとて残りたる。丈六の佛九體いと尊くてならばおはします。行成大納言の額兼行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法華堂などもいまだ侍るめり。これもまたいつまでかあらん。かばかりの名残だになき所々は、おのづから礎ばかり残るもあれど、さだかに知れる人もなし。されば、よろづに見ざらん世まで思ひおきてんこそ、はかなかるべけれ。(第二十五段)

六 過ぎにし方

しづかに思へば、よろづに過ぎにし方のこひしさのみぞせんかたなき。人しづまりて後、長き夜のすさびに、何となき具足取りしたため、残しおかじと思ふ、反古などやりすつる中に、亡き人の手習ひ、繪書きすさびたる見出でたるこそ、たゞその折の心地すれ。この

頃ある人の文だに、久しくなりて、いかなる折、いつの年なりけんと思ふは、あはれなるぞかし。手なれし具足なども、心もなく變らず久しき、いとかなし。(第二十九段)

七 人の亡きあと

人のなきあとばかり悲しきはなし。中陰の程、山里などにうつろひて、便あしくせば、所にあまたあひ居て、後のわざども營みあへる、心あわたゞし。日數のはやく過ぐる程、物にも似ぬ。はての日はいと情なう、互にいふこともなく、我賢げに物ひきしたゝめ、ちりぢりに行きあかれぬ。もとの住家に歸りてぞ、更に悲しき事は多かるべき。

「しかく」の事は、あなかしこ、後のため忌むなることぞ、などいへる

去る者は云々  
去者曰已疎。  
來者曰已親。  
(文選)

いづれの人と  
云々

古墓何代人。  
不知姓與名。  
化為路傍生。  
土二年春草  
(白氏文集)  
嵐に咽びし松  
の云々  
古墓型爲田。  
松柏摧爲新。  
(文選)

こそ、かばかりの中に何かはと、人の心は猶うたておぼゆれ。  
年月経てもつゆ忘るゝにはあらねど、去る者は日々に疎し。といへ  
ることなれば、さはいへど、そのきはばかりは覚えぬにや、よしなし  
ごとといひてうちも笑ひぬ。

骸はけうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり詣てつゝ見れ  
ば、程なく卒都婆も苔蒸し、木の葉降り埋みて、夕の嵐、夜の月のみぞ  
こととふよすがなりける。

思ひ出でてしのぶ人あらん程こそあらめ、そもまた程なく失せて、  
聞き傳ふるばかりの末々は、あはれとやはおもふ。さるは跡とふ  
わざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草の  
みぞ、心あらん人はあはれと見るべきを、はては嵐に咽びし松も、千  
年を待たで薪に摧かれ、古き墳は鋤かれて田となりぬ。そのかた

だに無くなりぬるぞ悲しき。(第三十段)

八 雪のあした

雪のおもしろう降りたりしあした、人のがりにふべきことありて  
文をやるとて、雪のこと何ともいはざりしかへりごとに、この雪、い  
かゞ見ると一筆のたまはせぬ程のひがくしからん人のおほせ  
らるゝこと、聴きいるべきかは。かへすくくちをしき御心なり。  
といひたりしこそをかしかりしか。今は亡き人なれば、かばかり  
のことも忘れがたし。(第三十一段)

九 荒れたる庭

九月廿日の頃、ある人にさそはれ奉りて、明くるまで月見ありく事

侍りしに、思し出づる所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。荒れたる庭の露繁きに、わざとならぬ匂しめやかにかにうちかをりて、忍びたるけはひ、いと物哀なり。よきほどにて出て給ひぬれど、猶事さまの優に覺えて、物のかくれよりしほし見居たるに、妻戸を今すこし押しあけて、月見るけしきなり。やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。跡まで見る人ありとは、いかでか知らん。かやうの事は、たゞ朝夕の心づかひによるべし。其の人程なく失せにけりとぞ聞き侍りし。(第三十二段)

一〇 法然上人

法然上人  
淨土宗の開祖  
鎌倉初期の  
人。

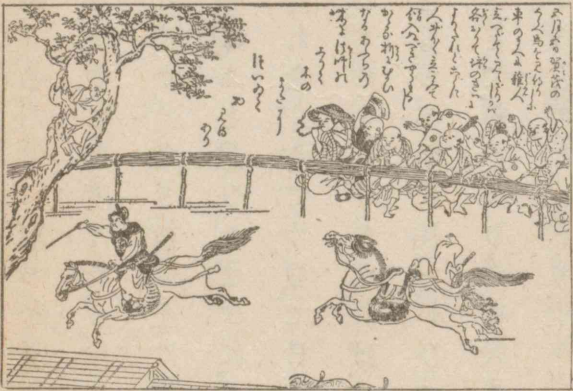
或人法然上人に、念佛の時、眠にかされて行を怠り侍ること、いか

ど念佛し給へ」と答へられたりける、いと尊かりけり。又「往生は一定と思へば一定、不定と思へば不定なり」といはれけり。これも尊し。又「疑ひながらも念佛すれば往生す」ともいはれけり。これも

また尊し。(第三十九段)

一一 賀茂のくらべ馬

五月五日、賀茂のくらべ馬を見侍りしに、車の前に、雑人立ち隔てて見えざりしかば、おのゝおりにて埒の際によりたれど、殊に人多く立ちこみて、わけ入りぬべきやうもなし。かゝる折に、むかひなる棟の木に法師の登りて、木の又についゐて



物見るあり。取りつきながら、いたう睡りて、落ちぬべき時に目を  
さますこと度々なり。これを見る人嘲りあざみて、世のしれ者か  
な。かく危き枝の上にて、安き心ありて睡るらんよ。といふに、我が  
心にふと思ひしまゝに、われらが生死の到來たゞ今にもやあらん、  
それを忘れて物見て日を暮らす。愚かなることは、なほまさりた  
るものを。といひたれば、前なる人ども、まことにこそ候ひけれ。も  
ともおろかに候。といひて、皆うしろを見かへりて、こゝへ入らせ給  
へ。とて、所を去りて、呼入れ侍りにき。

かほどのことわり、誰かは思ひよらざらんなれども、折からの思ひ  
かけぬ心地して、胸にあたりけるにや。人木石にあらねば、時にと  
りて物に感ずる事なきにしもあらず。 (第四十一段)

〇 一二 稻葉の露

あやしみの竹の編戸のうちより、いと若き男の、月影に色合さだかな  
らねど、艶やかなる狩衣に濃き指貫、いとゆゑづきたるさまにて、さ  
さやかなる童一人を具して、はるかなる田の中の細道を、稻葉の露  
にそぼちつゝ、分け行くほど、笛をえならず吹きすさびたる、あはれ  
と聞知るべき人もあらじと思ふに、行かん方知らまほしくて、見送  
りつゝ、行けば、笛を吹止みて、山の際に惣門のあるうちに入りぬ。  
榻に立てたる車の見ゆるも、都よりは目とまる心地して、下人に問  
へば、しかくの宮のおはします頃にて、御佛事などさぶらふにや、  
といふ。御堂のかたに法師ども参りたり。夜寒の風にさそはれ  
くる空だきものの匂も、身にしむ心地す。寢殿より御堂の廊にか

よふ女房のおひ風よういなど、人目なき山里ともいはず心づかひしたり。

心のまゝに茂れる秋の野らは置きあまる露に埋もれて、蟲の音かごとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりは雲のゆききもはやき心地して、月の晴れ曇ること定めがたし。(第四十四段)

一三 堀池の僧正

公世の二位のせうとに良覺僧正と聞えしは、きはめて腹あしき人なりけり。坊のかたはらに大きな榎の木がありければ、人榎の木の僧正とぞいひける。この名しかるべからずとて、彼の木を伐られにけり。その根のありければ、切き杖くわの僧正といひけり。いよいよ腹立ちて、切杖を掘棄てたりければ、その跡大いなる堀にてあ

公世の二位  
從二位藤原公世。

りければ、堀池の僧正とぞいひける。(第四十五段)

一四 鬼のそらごと

應長の頃、伊勢國より女の鬼になりたるをみてのぼりたりといふことありて、その頃二十日ばかり、日ごとに京白川の人鬼見にとて出でまどふ。「きのふは西園寺に参りたりし、けふは院へ参るべし、たゞ今はそこ〜に、などいひあへり。まさしく見たりといふ人もなく、そらごとといふ人もなし。上下たゞ鬼のことのみ言ひやまず。

その頃、東山より安居院の邊へまかり侍りしに、四條よりかみざまの人みな北をさして走る。「一條室町に鬼あり」とのゝしりあへり。今出川の邊より見やれば、院の御棧敷のあたり、更に通り得べうも

應長 花園天皇の時  
白川 京都賀茂川以東の地。  
西園寺 西園寺家をいふ。北山にあつた。  
院 伏見上皇。  
安居院 大宮通の北の末、通の東側にあつた寺。  
今出川 一條東洞院のあたりを北から流れる川。



あらず立ち込みたり。はやくあとなき事にはあらざめりとして、人をやりて見するに、大かた逢へるものなし。暮るゝまでかく立ちさわぎて、はては鬨諍おこりて、あさましきことどもありけり。その頃、おしなべて二三日人の煩ふこと侍りしをぞ、かの鬼の空言はこのしるしを示すなりけり。といふ人も侍りし。(第五十段)

一五 先達はあらまほし

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心うくおぼえて、ある時思ひたちて、たゞひとりかちよりまうでけり。極樂寺・高良などを拜みて、かばかりと心得てかへりにけり。さてかたへの人に逢ひて、年ごろ思ひつる事はたし侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも参りたる人ごとに山へ登りしは

仁和寺  
山城國葛野郡  
花園村。  
石清水  
山城國綴喜郡  
男山八幡宮。  
極樂寺  
男山の麓にあ  
る寺。  
高良  
男山の麓にあ  
る社。

何事かありけん。ゆかしかりしかど、神へまゐるこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。とぞいひける。すこしの事にも先達はあら

まほしきことなり。(第五十二段)

一六 足鼎



これも仁和寺の法師、わらはの法師にならんとする名残として、おのゝ遊ぶことありけるに、ゑひて興に入るあまり、かたはらなる足鼎をとりて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて顔をさし入れて舞ひいでたるに、満座興に入ることかぎりなし。しばしかなでて後、抜かんとするに、お

ほかたぬかれず。酒宴ことさめて、いかゞはせんとまどひけり。  
 とかくすれば、首のまはりかけて血垂り、たゞ腫れに腫れみちて息  
 もつまりければ、打ちわらんとすれど、たやすくわれず、響きてたへ  
 がたかりければ、すべきやうなくて、三足なる角の上に帷子つゝをうち  
 かけて、手を引き、杖をつかせて、京なるくすしのがりゐて行きける  
 に、道すがら人のあやしみ見るにかぎりなし。くすしのもとに  
 さしいりて對ひるたりけん有様、さこそことやうなりけめ。物を  
 言ふもくゞもりごゑに響きて聞えず。「かゝることは文にも見え  
 ず、傳へたる教もなし」といへば、また仁和寺へ歸りて、親しき者、老い  
 たる母など、枕がみに寄りゐて泣き悲しめども、聞くらんとも覺え  
 ず。かゝるほどに、ある者のいふやう、たとひ耳鼻こそ切れうすと  
 も、命ばかりはなか生きざらん。たゞ力を立てて引きたまへ」と

て、薬のしべをまはりにさし入れてかねを隔てて、首もちぎるゝば  
 かり引きたるに、耳鼻かけうげながら抜けにけり。からき命まう  
 けて、久しく病みゐたりけり。 (第五十三段)

一七 いもがしら

眞乘院に盛親僧都とてやんごとなき智  
 者ありけり。いもがしらといふものを  
 このみて多く食ひけり。談義の座にて  
 も、大きな鉢にうづだかくもりて、膝も  
 とにおきて、食ひながら文をもよみけり。  
 わづらふことあるには七日、二七日など、  
 療治とてこもりゐて、思ふやうによきい



眞乘院  
仁和寺に附屬  
した寺院。

もがしらをえらびて、殊に多く食ひて、よろづの病をいやしけり。  
人に食はすることなし。たゞひとりのみぞ食ひける。きはめて  
貧しかりけるに、師匠死にざまに錢二百貫と坊ひとつとをゆづり  
たりけるを、坊を百貫に賣りて、かれこれ三萬疋をいもがしらのあ  
しと定めて、京なる人にあづけ置きて、十貫づゝ取りよせて、いもが  
しらをともしからずめしけるほどに、又ことやうに用ゐることな  
くて、そのあしみなになりけり。「三百貫の物をまづしき身にま  
うけてかくはからひける、誠に有りがたき道心者なり」とぞ人申し  
ける。

この僧都みめよく力つよく、大食にて、能書、學匠、辯説人にすぐれて、  
宗の法燈なれば、寺中にもおもく思はれたりけれども、世をかく  
思ひたる曲者にて、よろづ自由にしておほかた人に従ふといふこ

宗  
眞言宗。

となし。出仕して、饗膳などにつく時も、皆人の前すゑわたすをも  
またず、わが前にすゑぬれば、やがて獨り打食ひて、歸りたければひ  
とりつゝ立ちて行きけり。とき非時ひじも人にひとしく定めてくは  
ず、わが食ひたき時、夜中にも曉にもくひて、ねぶたければ晝もかけ  
こもりて、いかなる大事あれども、人のいふこと聽入れず。目さめ  
ぬれば幾夜もいねず、心をすましてうそぶきありきなど、世の常な  
らぬさまなれども人にいとほれず、よろづ許されけり。徳の至れ  
りけるにや。(第六十段)

一八 名を聞くより

名を聞くよりやがて面影はおしはからるゝ心地するを、見る時は  
またかねて思ひつるまゝの顔したる人こそなけれ。昔ものがた

りを聞きても、このごろの人の家のそこほどにてぞありけんとおほえ、人も今見る人の中におもひよそへらるゝは、誰もかくおほゆるにや。また、いかなる折ぞ、たゞ今人のいふことも、目に見ゆるものも、わが心のうちも、かゝることのいつぞや有りしかとおほえて、いつとは思ひいでねども、まさしくありし心地のするは、われればかりかく思ふにや。 (第七十一段)

一九 下部に酒飲ますること

下部に酒飲ますることは心すべきことなり。宇治にすみけるをのこ、京に具覺坊とてなまめきたる遁世の僧を、小舅なりければ、常に申し睦びけり。ある時むかへに馬を遣はしたりければ、はるかなる程なり、口つきのをのこにまづ一度せさせよ。とて、酒を出した

木幡  
山城國宇治郡

れば、さし受けさし受けよ、と飲みぬ。太刀うちはきてかひくしげなれば、たのもしくおほえて召具して行くほどに、木幡のほどにて、奈良法師の兵士數多具して遇ひたるに、このをのこ立ちむかひて、日暮れにたる山中に、怪しきぞ、とまり候へ。といひて、太刀を引抜きければ、人もみな太刀抜き矢はげなどしけるを、具覺坊手をすりて、うつし心なく酔ひたるものに候。枉げてゆるし給はらん。といひければ、各あげりて過ぎぬ。この男具覺坊にあひて、御坊は口をしきことし給ひつるものかな。おのれ酔ひたること侍らず。高名つかまつらんとするを、



梶原  
木幡の附近に  
ある原。

抜ける太刀むなしくなし給ひつること。と怒りて、ひた斬りに斬り  
落しつ。さて「山だちあり」とのゝしりければ、里人おこりて、出であ  
へば、われこそ山だちよ」といひて、走りかゝりつゝ、斬りまはりける  
を、あまたして手負はせ、うち伏せて縛りけり。馬は血つきて、宇治  
大路の家に走り入りたり。あさましくて、をのこどもあまた走ら  
かしたれば、具覺坊は梶原くわしはらによび臥したるを、求め出でて舁きも  
てきつ。からき命生きたれど、腰斬り損ぜられてかたはになりに  
けり。(第八十七段)

二〇 猫また

「奥山に猫またといふものありて人を食ふなる」と人のいひけるに、  
山ならねども、これらにも猫のへあがりて猫またになりて、人とする

ことはあなるものを。といふものありけるを、何阿彌陀佛とかや、連  
歌しける法師の行願寺のほとりにあり  
けるが聞きて、ひとりありかん身は心す  
べきことにこそ。と思ひける頃しも、ある  
ところにて夜ふくるまで連歌して、たゞ  
一人かへりけるに、小河のはたにて、音に  
聞きし猫またあやまたず足のもとへふ  
とより来て、やがて搔きつくまゝに、頸の  
ほどをくはんとす。肝心もうせて、防が  
んとするに力もなく、足もたゞず、小河へ  
ころび入りて、助けよや、猫またよや、猫またよや、とさけば、家々よ  
り松どもともして走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧な



り。「こはいかに」とて、河の中よりいだき起したれば、連歌の賭物と  
りて扇小箱など懐に持ちたるも水に入りぬ。  
希有にしてたすかりたるさまにて、はふく／＼家に入りにけり。飼  
ひたる犬の、暗けれど主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。

(第八十九段)

二一 弓射ることを習ふに

ある人、弓射ることを習ふに、もろ矢をたばさみて、箭にむかふ。師  
のいはく、初心の人、二つの矢を持つことなかれ。後の矢をたのみ  
て、はじめの矢になほざりの心あり。毎度たゞ得失なく、この一矢  
に定むべしと思へ。といふ。わづかに二つの矢、師の前にて一つを  
おろそかにせんと思はんや。懈怠の心みづから知らずといへど

も、師これを知る。このいましめ萬事に  
わたるべし。

道を學する人、夕には朝あらんことを思  
ひ、朝には夕あらんことを思ひて、かさね  
てねんごろに修せんことを期す。いは  
んや、一刹那のうちにおいて、懈怠の心あ  
ることを知らんや。何ぞたゞいまの一  
念において、直ちにすることのはなはだ  
難き。(第九十二段)

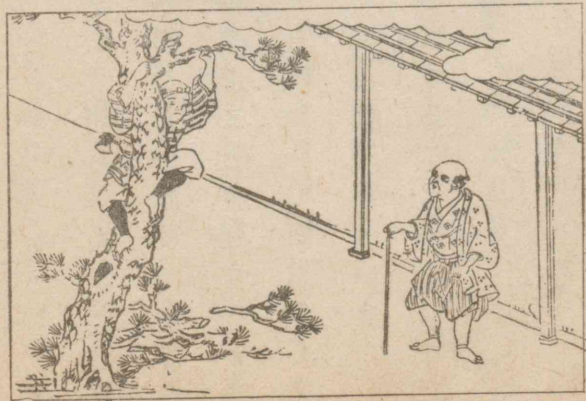


二二 高名の木のぼり

高名の木のぼりと云ひし男、人を掟て、高き木にのぼせて、梢を切

聖人のいましめ  
 君子安而不  
 忘危、存而  
 不亡、亡、治  
 而不亂、亂、  
 而不亂、亂、  
 是以身安、而  
 國家可保也。  
 (易經、繫辭傳)

らせしに、いとあやふく見えしほどは、いふことも無く、下るゝ時に、軒たけばかりになりて、あやまちすな。心して下りよ。と詞をかけ侍りしを、かばかりになりては、飛びおるゝともおりなん。いかにかくいふぞ。と申し侍りしかば、そのことに候。目くるめき枝あやふきほどは、おのれがおそれ侍れば申さず。過は安きところになりて、かならず仕ることに候。といふ。あやしき下藤なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠も、難きところを蹴出して後安く思へばかならず落つと侍るやらん。(第九段)



二二三 ぼろく

宿河原  
 攝津國にある  
 といふ。  
 武藏國橋樹郡  
 にも同名の地  
 がある。



宿河原といふところにて、ぼろく多くあつまりて、九品の念佛を申しけるに、外より入りくるぼろくの、もしこの中にいろおし坊と申すぼろやおはします。とたづねければ、その中より、いろおしこゝに候。かくのたまふはたぞ。とこたふれば、しら梵字と申すものなり。おのれが師なにがしと申しし人、東國にて、いろおしと申すぼろに殺されけりと承りしかば、その人にあひ奉りて、恨み申さばやと思ひてたづね申すなり。と

いふ。いろおし、ゆゝしくも尋ねおはしたり。さること侍りき。こゝにて對面したてまつらば、道場を汚し侍るべし。前の河原へ参りあはん。あなかしこ、わきざしたち、いづかたをもみつぎ給ふな。あまたの煩にならば、佛事のさまたげに侍るべし。といひ定めて、二人河原へ出であひて、心ゆくばかりに貫きあひて、ともに死にけり。

ぼろくといふもの昔はなかりけるにや。近き世にぼろんじ梵字漢字などいひける者、そのはじめなりけるとかや。世を捨てたるに似て我執ふかく、佛道をねがふに似て鬪諍を事とす。放逸無慙の有様なれども、死を軽くして少しもなづまざるかたの潔く覺えて、人の語りしまゝに書きつけ侍るなり。(第百十五段)

二四 顔回は

顔回は云々  
顔淵曰、顔無  
代善、無施  
勞(論語)  
いやしき民云  
云  
三軍可奪帥  
匹夫不可奪  
志。(論語)

薬を飲んで云  
云  
夫服薬求汗  
或有弗獲  
而愧情一集  
渙然流離(文  
選)

顔回は、志人に勞をほどこさじとなり。すべて人を苦しめ、物をしへたぐる事、いやしき民の志を奪ふべからず。又いとけなき子をすかしおどし、言ひ恥かしめて興ずる事あり。大人しき人は、まことならねば、事にもあらず思へど、幼き心には、身にしみておそろしくはづかしくあさましき思、まことに切なるべし。これを惱まして興ずること、慈悲の心にあらず。大人しき人の、喜び怒り悲しび樂しむも皆虚妄なれども、誰か實有の相に着せざる。身を破るよりも、心を痛ましむるは、人を損ふ事なほ甚し。病を受くることも、多くは心より受く。外より來る病は少し。薬を飲んで汗を求むるには、しるしなきことあれども、一



凌雲の額

魏明帝立三凌雲觀、誤先釘榜、乃以龍盛、韋誕、韓融引上書之、去、地二十五丈、既下、魏斐皓然、還語子弟、直絕此法。(三國志)

且恥ぢ恐るゝことあれば必ず汗を流すは、心のしわざなりといふことを知るべし。凌雲の額を書きて、白頭の人となりしたためし無きにあらず。(第百二十九段)

二五 花はさかりに

花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行方知らぬも、猶あはれに情ふかし。咲きぬべき程の梢、散りしほれたる庭などこそ見所おほけれ。歌のとばがきにも、花見にまかれりけるに、はやく散りすぎにければ、とも、障る事ありて、まからで、なども書けるは、花を見て、といへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くをしたふ習はさる事なれど、とにかたくななる人ぞ、この枝かの枝散りにけり。今は見所なし。

たれこめて云

たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻も移ろひにけり。(古今集、藤原のよるかの朝臣)

などはいふめる。

萬の事も始終こそをかしけれ。望月のくまなきを千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて待ちいでたるが、いと心ふかう、青みたるやうにて、深き山の杉のこずゑに見えたる木の間の影、うちしぐれたる叢雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎柴白樫などの濡れたるやうなる葉の上にくらめきたるこそ、身に沁みて、心あらん友もがなと、都こひしうおほゆれ。

すべて月花をばさのみ目にて見るものかは。春は家を立ちさらでも、月の夜は闇のうちながら思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。

よき人はひとへにすける様にも見えず、興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のもとには

祭  
賀茂の祭。



ねぢより立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み連歌して、はては大きなる枝、心なくをり取りぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおりたちて跡つけなど、よろづの物よ  
 そながら見ることなし。  
 さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。「見ごといとおそし。そのほどは、棧敷不用なり。」とて、奥なる屋にて酒飲み、物食ひ、圍碁、雙六などあそびて、棧敷には人を置きたれば、「渡り候」といふ時に、おのおの肝つぶるゝやうにあらそひ走りのぼりて、落ちぬべきまで簾はり出でて  
 押しあひつゝ、一事も見漏らさじとまもりて、とあり、かゝり」と物ご

とにいひて、渡り過ぎぬれば、また渡らんまで、といひて下りぬ。ただ物をのみ見んとするなるべし。都の人のゆゝしげなるは、睡りていとも見ず、若く末々なるは、宮づかへにたちぬ、人のうしろにさぶらふは、さまあしくも及びかゝらず、わりなく見んとする人もなし。

何となく葵かけ渡してなまめかしきに、明けはなれぬ程、しのびて寄する車どものゆかしきを、それかかれかなと思ひ寄すれば、牛飼下部などの見知れるもあり。をかしくもきらゝしくもさまざまに行きかふ見るもつれゝならず。暮るゝ程には、立て並べつる車ども、所なく並みゐつる人も、いづかたへ行きつらん程なく稀になりて、車どものらうがはしさもすみぬれば、簾疊も取りはらひ、目の前にさびしげになり行くこそ、世のためしも思ひ知られてあ

舟岡  
舟岡山。愛宕郡大宮村にある。古くから火葬場であった。

はれなれ。大路見たるこそ祭見たるにてはあれ。  
かの棧敷の前をこゝら行きかふ人の見知れるがあまたあるにて  
知りぬ、世の人数もさのみは多からぬにこそ。この人皆失せなん  
後わが身死ぬべきに定まりたりとも、程なく待ちつけぬべし。大  
きなるうつはものに水を入れて、細き孔をあけたらんに、滴ること  
少しといふとも、怠る間なく漏りゆかば、やがて盡きぬべし。都の  
うちに多き人、死なざる日はあるべからず。一日に一人二人のみ  
ならんや。鳥部野舟岡、さらぬ野山にも送る數多かる日はあれど、  
おくらぬ日はなし。されば棺をひさぐもの、造りてうち置くほど  
なし。若きにもよらず、強きにもよらず、思ひがけぬは死期なり。  
けふまでのがれ來にけるは有りがたき不思議なり。暫しも世を  
のどかには思ひなんや。兵のいくさに出づるは、死に近きことを

知りて、家をも忘れ、身をも忘る。世をそむける草の庵には、靜かに  
水石をもてあそびて、これをよそに聞くと思へる、いとかなし。  
靜かなる山の奥、無常のかたききほひ來らざらんや。その死にの  
ぞめること、いくさの陣にすゝめるにおなじ。 (第百三十七段)

〇 二六 能をつかんとする人

能をつかんとする人、よくせざらん程は、なまじひに人に知られじ、  
うちよく習ひ得てさし出でたらんこそ、いと心にくからめ。と  
常にいふめれど、かくいふ人一藝も習ひ得ることなし。いまだ堅  
固かたほなるより上手の中にまじりて、譏り笑はるゝにも恥ぢず、  
つれなく過ぎてたしなむ人、天性その骨なけれども、道になづまず、  
妄りにせずして年を送れば、堪能のたしなまざるよりは、遂に上手

の位にいたり、徳たけ、人にゆるされて、雙なき名を得ることなり。天下の物の上手といへども、はじめは不堪の聞えもあり、無下の瑕瑾もありき。されども、その人、道のおきて正しく、これを重くして放埒せざれば、世の博士にて萬人の師となること、諸道かはるべからず。(第百五十段)

二七 筆をとればもの書かれ

筆をとればもの書かれ、樂器をとれば音を立てんと思ふ。盃をとれば酒を思ひ、賽をとれば攤うたん事を思ふ。心は必ず事に觸れてきたる。かりにも不善の戯を爲すべからず。あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。卒爾にして多年の非を改むる事もあり。かりに今この文をひろげざらましかば、こ

の事を知らんや。これ則ち觸るゝ所の益なり。

心更に起らずとも、佛前に在りて數珠をとり、經をとらば、怠るうちにも善業自ら修せられ、散亂の心ながらも繩床に坐せば、覺えずして禪定なるべし。事理もとより二ならず。外相若し背かざれば、内證必ず熟す。強ひて不信と云ふべからず、仰ぎてこれを尊むべし。(第百五十七段)

二八 一道にたづさはる人

一道にたづさはる人、あらぬ道のむしろに臨みて、あはれ我が道ならましかば、かくよそに見侍らじものをといひ、心にも思へること常の事なれど、世にわろく覺ゆるなり。知らぬ道の羨しく覺えば、「あな羨し。などか習はざりけん」といひてありなん。

我が智を取り出でて人に争ふは、角あるものの角を傾け、牙あるものの牙をかみ出すたぐひなり。人としては善に誇らず、物と争はざるを徳とす。他にまさることのあるは大いなる失なり。

品の高さにて、才藝のすぐれたるにても、先祖の譽にても、人にまされりと思へる人は、たとひ言葉に出でてこそ云はねども、内心にそこばくの咎あり。慎みてこれを忘るべし。をこにも見え、人にも言ひけたれ、禍をも招くは、たゞこの慢心なり。一道にもまことに長じぬる人は、みづから明かにその非を知る故に、志常に満たずして、遂にもものに誇るることなし。(第百六十七段)

〇二九 さしたる事なくて

さしたる事なくて、人のがり行くは、よからぬことなり。用ありて

行きたりとも、其の事果てなば、とく歸るべし。久しく居たる、いとむづかし。

人と向ひたれば、言葉多く、身もくたびれ、心も静かならず、萬の事さはりて、時を移す。互のため益なし。いとほしげにいはんもわろし。心づきなき事あらん折は、なか／＼其の由をも言ひてん。

同じ心に向はまほしく思はん人の、つれ／＼にて、今しばし、今日は心静かに、などいはんは、このかぎりにはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべきことなり。その事となきに、人の來りて、長閑に物語して歸りぬる、いとよし。又文も、久しく聞えさせねば、などばかりいひおこせたる、いとうれし。(第百七十段)

三〇 貝をおほふ人

阮籍 晋の人。竹林の七賢の一人。「阮籍字嗣宗、不拘禮教、能爲青白眼、對之。母死、及當喜來弔、籍作白眼。喜不擇而退、喜弟康聞之、乃齋酒挾琴造焉。籍大悅乃見青眼。」(晉書)

清獻公

宋の趙抃。その座右銘に、

「行好事、莫問前程。」とある。

風にあたり云

常不能慎事

上者自致三百

病之本、而怨

咎於神靈乎。

當風臥、濕反

實、他人於失

覆。皆痴人也。

(本草序)

貝をおほふ人の、わが前なるをばおきて、よそを見渡して、人の袖のかげ、膝の下まで目をくばるまに、前なるをば人におほはれぬ。よ  
くおほふ人は、よそまでわりなく取るとは見えずして、近きばかり  
おほふやうなれど、多くおほふなり。碁盤のすみに石をたてては  
じくに、むかひなる石をまもりてはじくはあたらず。わが手もと  
をよく見て、こゝなるひじりめをすぐにはじけば、立てたる石必ず  
あたる。

萬の事、外に向きて求むべからず。たゞこゝもとを正しくすべし。  
清獻公が言葉に、「好事を行じて前程を問ふことなかれ」といへり。  
世をたもたん道もかくや侍らん。内をつゝしまし、軽くほしきま  
まにしてみだりなれば、遠國かならずそむく時、はじめてはかりこ  
とをもとむ。「風にあたり、濕にふして、病を神靈に訴ふるは、愚なる

人なり。」と醫書にいへるがごとし。目の前なる人の愁をやめ、惠を  
ほどこし、道を正しくせば、その化とほく流れんことを知らざるな  
り。(第百七十一段)

三一 わかき時

若き時は血氣内にあまり、心物に動きて情欲多し。身をあやぶめ  
て碎けやすきこと、玉を走らしむるに似たり。美麗を好みて財を  
費し、これを捨てて苔の袂にやつれ、勇める心さかりにして物と争  
ひ、心に恥ぢうらやみ、好む所日々に定まらず、色にふけり、情にめて、  
行をいさぎよくして百年の身を誤り命を失へるためし願はしく  
して、身のまたく久しからんことをば思はず、すけるかたに心ひき  
て、ながき世がたりともなる。身をあやまつことは、若きときのし

わざなり。老いぬる人は精神衰へ、あはくおろそかにして、感じ動く所なし。心おのづから静かなれば、無益のわざをなさず、身をたすけて憂なく、人のわづらひなからんことを思ふ。老いて智の若き時にまされること、若くしてかたちの老いたるにまされるがごとし。(第百七十二段)

〇 三二 世には心得ぬことの多き

世には心得ぬ事の多きなり。ともあるごとには、先づ酒をすゝめて、強ひ飲ませたるを興とすること、いかなる故とも心得ず。飲む人のかほいと堪へがたげに眉をひそめ、人目をはかりてすてんとし、遁げんとするを捉へて引きとめて、すゝろに飲ませつれば、うるはしき人も忽ちに狂人となりてをこがましく、息災なる人も目

の前に大事の病者となりて、前後も知らずたふれふす。祝ふべき日などはあさましかりぬべし。あくる日まで頭いたく、物くはずによびふし、生を隔てたるやうにして、昨日のこと覚えず、おほやけ、わたくしの大事を缺きて、わづらひとなる。人をしてかゝるめを見する事、慈悲もなく禮儀にもそむけり。かくからきめにあひたらん人、ねたく口惜しと思はざらんや。人の國にかゝる習あなりと、これらになき人事にて傳へ聞きたらんは、あやしく不思議に覚えぬべし。

人の上にて見たるだに心うし。思ひ入りたるさまに、心にくしと見し人も、思ふ所なく笑ひのゝしり、言葉多く、烏帽子ゆがみ、紐はづし、脛高くかゝげて、よういなき氣色、日ごろの人とも覚えず。女は額髪はれらかに、かきやり、まばゆからず顔うちさゝげて、うちわら

ひ、盃持てる手に取りつき、よからぬ人は肴取りて口にさしあて、みづからも食ひたる、さまあし。聲のかぎり出して、おのゝ歌ひ舞ひ、年老いたる法師召し出されて、黒くきたなき身をかたぬぎて、目もあてられず、すぢりたるを、興じ見る人さへうとましくにくし。あるは又、わが身いみじき事どもかたはら痛くいひ聞かせ、あるは醉泣きし、下さまの人はのりあひいさかひて、あさましく、おそろしく、耻ぢがましく、こゝろうき事のみありて、はては許さぬ物どもおし取りて縁よりおち、馬車より落ちてあやまちしつ。物にも乗らぬ際は、大路をよろほひ行きて、築土門の下などに向きて、得もいはぬ事どもしちらし、年老い袈裟かけたる法師の聞えぬ事どもいひつゝ、よろめきたる、いとかはゆし。かゝる事をして、この世も後の世も益あるべき業ならば、いか

百薬の長  
夫鹽食者之將  
酒百薬之長。  
(漢書)

酒を取りて云

一若自身手過  
酒器、與人飲  
レ酒者、五百生  
無レ手。梵經

時頼  
北條氏。鎌倉  
五代の執權。

義景  
安達氏。

はせん。この世には過多く、財をうしなひ、病をまうく。百薬の長とはいへど、萬の病は酒よりこそ起れ、うれへを忘るといへど、酔ひたる人ぞ過ぎにし憂さをも思ひ出でて泣くめる。後の世は、人の智慧をうしなひ、善根を焼くこと火のごとくして、惡を増し、よろづの戒をやぶりて、地獄に落つべし。酒を取りて人に飲ませたる人、五百生が間手なきものに生る。とこそ、佛は説き給ふなれ。

(第百七十五段)

三三 松下禪尼

相模守時頼の母は松下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるゝ事ありけるに、すゝけたる明障子のやぶれば、かりを、禪尼手づから小刀して切りまはしつゝ、張られければ、せうとの城介義景その日のけいめいして候ひけるが、賜はりてなにがし男に張らせ候はん。





さやうの事に心得たるものに候と申されければ、その男、尼が細工によもまさり侍らじとて、なほ一間づゝ張られけるを義景、みなを張りかへ候はんは遙かにたやすく候べし。まだらに候も見ぐるしくやと重ねて申されければ、尼も後はさはさはと張りかへんと思へども、けふばかりはわざとかくてあるべきなり。物はやぶれたる所ばかりを修理して用ゐることぞと、わかき人に見ならはせて心づけんためなりと申されける、いと有りがたかりけり。世を治むる道、儉約をもととす。女性なれども聖人の心にかよへり。天下をた

もつほどの人を子に持たれける、誠にたゞ人にはあらざりけりとぞ。  
(第百八十四段)

三四 よろづの道の人

よろづの道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人にならぶ時、必ずまさることは、たゆみなくつゝしみてかろくしくせぬと、ひとへに自由なるとの等しからぬなり。藝能所作のみにあらず、大方の振舞、心づかひも、おろそかにして慎めるは得のもとなり。巧にしてほしきまゝなるは失のもとなり。  
(第百八十七段)

三五 一事を勵むべし

あるもの子を法師になして、學問して因果の理をも知り、説經など

して世渡るたつきともせよ、といひければ、をしへのまゝに説經師にならんために、まづ馬に乗りならひけり。輿車持たぬ身の、導師に請ぜられん時、馬など迎におこせたらんに、もゝじりにて落ちなんは心うかるべしとおもひけり。次に佛事の、後、酒などすゝむることあらんに、法師の、無下に能なきは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふことをならひけり。二つの業やうゝ境に入りければ、いよゝゝよくしたく覺えてたしなみける程に、説經習ふべき隙なくて年よりにけり。

この法師のみにもあらず、世間の人なべてこのことあり。若き程は諸事につけて、身を立て、大いなる道をも成し、能をもつき、學問をもせんと、行末久しくあらますことども心にはかけながら、世をのどかに思ひて打怠りつゝ、まづさしあたりたる目の前の事にのみ

紛れて月日を送れば、事毎になす事なくして、身は老いぬ。遂に物の上手にもならず、思ひしやうに身をも持たず。悔ゆれども取りかへさるゝ、齡ならねば、走りて坂を下る輪の如くに衰へ行く。されば一生のうちに、むねとあらまほしからんことの中に、いづれかまさると、よく思ひくらべて、第一の事を案じさだめて、その外は思ひすてて、一事をはげむべし。一日の中、一時の中にも、あまたの事の來らんうちに、少しも益のまさらん事をいとなみて、その外をばうち捨てて大事をいそぐべきなり。何方をも捨てじと心にとりもちては、一事も成るべからず。

たとへば碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人に先だちて、小をすてて大につくがごとし。それにとりて、三つの石を捨てて十の石につくことは易し、十を捨てて十一につくことは難し。一つなり

東山

京都の東方に  
つらなる山々  
の總稱。

西山

東山に對して  
西の方麓、  
西方の山をいふ

ともまさらん方へこそつくべきを、十までなりぬれば惜しく覺えて、多くまさらぬ石には換へにくし。これをも捨てず、かれをも取らんと思ふ心に、かれをも得ず、これをも失ふべき道なり。京に住む人、いそぎて東山に用ありてすてに行きつきたりとも、西山に行きてその益まさるべきことを思ひ得たらば、門よりかへりて西山に行くべきなり。こゝまで來着きぬれば、この事をば先づいひてん、日をさゝぬことなれば西山の事は歸りて又こそ思ひ立ためと思ふゆゑに、一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる。これを恐るべし。

一事を必ずなさんと思はば、他の事の破るゝをもいたむべからず、人のあざけりをも恥づべからず。萬事に換へずしては一の大事成るべからず。(第百八十八段)

三六 よろづのとが

萬のとがあらじと思はば、何事も誠ありて、人を分かずうやくし、言葉すくなからんには如かじ。男女老少、皆さる人こそよけれども、殊に若くかたちよき人の言うるはしきは、忘れがたく思ひつかるゝものなり。よろづの咎は、慣れたるさまに上手めき、所得たるけしきして、人をないがしろにするにあり。(第二百三十三段)

三七 主ある家

主ある家にはすゞろなる人、心のまゝに入り來ることなし。主なき所には道行く人みだりに立入り、狐鼻やうのものも、人げにせかれねば、所得顔に入住み、こだまなどいふけしからぬかたちも現る

るものなり。また鏡には色形なきゆゑに、よろづのかげ來りてうつる。鏡に色形あらましかばうつらざらまし。虚空よく物を容る。われ等の心に念々のほしきまゝに來りうかぶも、心といふものなきにやあらん。心にぬしあらましかば、胸のうちこそくの事は入り來らざらまし。(第二百三十五段)

三八 獅子狛犬

出雲  
桑田郡。  
大社  
出雲の大社。  
蘇川郡杵築町  
にある。

丹波に出雲といふ處あり。大社を遷してめでたく造れり。志太の何がしとかや知る所なれば、秋の頃、聖海上人、その外も人あまたさそひて、いざたまへ、出雲拜みに。かいもちひめさせん。とて、具しもて行きたるに、各拜みてゆゝしく信起したり。御前なる獅子狛犬、背きてうしろざまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、あな

めでたや。この獅子の立てやういとめづらし。深きゆゑあらん。と涙ぐみて、いかに殿ばら、殊勝の事は御覽じとがめずや。無下なり。といへば、おのゝ怪しみて、まことに他にことなりけり。都のつとに語らん。などいふに、上人猶ゆかしがりて、おとなしく、もの知りぬべき顔したる神官を呼びて、この御社の獅子の立てられやう、定めて習あることに侍らん。ちと承らばや。といはれければ、そのことに候。さがなきわらはべどもの仕りける、奇怪に候事なり。とて、さしよりて据直して去にければ、上人の感涙いたづらになりにけり。(第二百三十六段)

歴代文學讀本 卷四終



粟屋泰子

庫  
30  
809

広島大学図書  
2000079809  
